

文部科学省 平成 30 年度「大学の世界展開力強化事業（米国）」
～COIL 型教育を活用した米国等の大学間交流形成支援～

MEXT Inter-University Exchange Project (Adopted Year FY2018)
“Support for the Formation of Collaborative Programs with U.S. Universities
using COIL-style Education”

人間の安全保障と多文化共生に係る課題発見型
国際協働オンライン学習プログラムの開発

COIL Programs for Human Security and
Multicultural Coexistence

総 括 報 告 書 (2018-2022 年度) Concluding Report (FY2018-2022)

上智大学・お茶の水女子大学・静岡県立大学

Sophia University / Ochanomizu University / University of Shizuoka



目次

I.	はじめに	1
	上智大学 学務担当副学長 伊呂原 隆	
II.	事業概要・成果報告および今後の展望	3
III.	COIL 科目・プログラム報告	
	1. お茶の水女子大学の上智大学・静岡県立大学・ゴンザガ大学との交流授業 (3 大学合同 ゴンザガ大学オンラインプログラム)	9
	お茶の水女子大学 教授 小林 誠	
	2. お茶の水女子大学 国際学生フォーラム	10
	お茶の水女子大学 国際教育センター長 森山新	
	3. 上智大学 世界の看護学生とのグローバルな学びの共有	12
	上智大学 総合人間科学部看護学科准教授 吉野八重	
	4. 静岡県立大学「日本語学演習」と ノースカロライナ大学シャーロット校「日本語」科目との交流	13
	静岡県立大学 国際交流センター長 澤崎宏一	
	5. 静岡スタディツアー	14
	6. Jesuit Worldwide Learning (JWL) 連携プログラム	16
	上智大学 グローバル教育センター特任助教 李ウオンギョン	
IV.	総括シンポジウム報告	
	1. プログラム	18
	2. 発表資料	19
	3. 第 1 部「COIL 経験学生パネルディスカッション」登壇学生の声	26
	上智大学：橘川由依 (3 大学合同 ゴンザガ大学オンラインプログラム)	
	上智大学：前田空、山口祐奈 (看護学科科目)	
	お茶の水女子大学：田上湖都 (国際学生フォーラム)	
	4. 第 2 部「3 大学副学長パネルディスカッション」まとめ	29
	上智大学 グローバル教育センター長 出口真紀子	
	5. シンポジウム総括	30
	静岡県立大学 副学長 (国際交流担当) 富沢壽勇	
V.	事業総括	31
	お茶の水女子大学 理事・副学長 石井クンツ昌子	

Contents

I .	Introduction	35
	Takashi Irohara, Vice President for Academic Affairs, Sophia University	
II .	Project Overview, Report of Results, and Future Prospects	38
III.	Report of COIL Courses/Programs	
1 .	Joint Online Program with Gonzaga University	46
	Makoto Kobayashi, Professor, Ochanomizu University	
2 .	Ochanomizu University: International Student Forum	47
	Shin Moriyama, Professor, Director of Center for International Education, Ochanomizu University	
3 .	Sophia University: Learning Together with Nursing Students around the World	50
	Yae Yoshino, Associate Professor, Department of Nursing, Faculty of Human Sciences, Sophia University	
4 .	Class Exchange between “Seminar (Japanese Language)” at the University of Shizuoka and a “Japanese language” course at the University of North Carolina at Charlotte	52
	Koichi Sawasaki, Professor, School of International Relations/Director of International Affairs Center, University of Shizuoka	
5 .	Shizuoka Study Tour	54
6 .	Collaborative Programs with Jesuit Worldwide Learning (JWL)	57
	Wonkyung Rhee, Assistant Professor, Center for Global Education and Discovery, Sophia University	
IV.	Report of COIL International Summary Symposium	
1 .	Program	59
2 .	Presentation Slides	61
3 .	Voices of Students from Part 1: “Panel Discussion with COIL Experienced Students”	63
	Yui Kitsukawa, Sophia University (Joint Online Program with Gonzaga University) Sora Maeda, Yuna Yamaguchi, Sophia University (Nursing Courses) Koto Tagami, Ochanomizu University (International Student Forum)	
4 .	Summary of Part 2 “Panel Discussion with Vice Presidents of Three Japanese Universities”	67
	Makiko Deguchi, Professor, Director of the Center for Global Education and Discovery, Sophia University	
5 .	Summary of the Symposium	69
	Hisao Tomizawa, Vice President for International Exchange, University of Shizuoka	
V.	Project Summary	70
	Masako Ishii-Kuntz, Trustee/Vice President, Ochanomizu University	

I. はじめに

上智大学 学務担当副学長／理工学部教授
伊呂原 隆

「人間の安全保障と多文化共生に係る課題発見型国際協働オンライン学習プログラムの開発」は、「平成 30 年度 大学の世界展開力強化事業 ～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」の一つで、上智大学、お茶の水女子大学、静岡県立大学の 3 大学が連携して申請し採択された事業である。この事業は、今年度末をもって 5 年間の事業を終えることになる。

COIL 型教育を導入する意義は、様々な理由から従来の教育形態では協働することが難しかった国内外の学生が、協働学習を通じて多角的に学ぶことを可能にすることにある。また、本事業では、こうした COIL 型教育の特性を活かして、日米の学生間交流を促進するとともに、第三国への教育発信を含めた国際高等教育の多層的展開および学生モビリティの向上を目指してきた。

日米両国は、SDGs のような国際社会の課題への取り組みでの協調とリーダーシップが求められている。このような背景のもと、日米の大学が連携して、異文化理解や交渉力、コミュニケーション力を修得し、多文化共生を考える素地を養う、グローバル・シティズンシップ教育の重要性が増している。人間の安全・安心な暮らしや健康を考える「人間の安全保障」と、多様性の理解や複眼的思考を基盤とした「多文化共生」を中心テーマとした課題発見型の日米協働教育プログラムを通じて、これら課題の解決に貢献できる人材の養成を目標として事業を展開してきた。

本事業の強みの一つは米国の連携大学および国内の連携大学の充実にある。米国の連携大学は、主として、上智大学とお茶の水女子大学が長年にわたり交流実績のある大学の中から COIL を活用した教育プログラムの共同実施に強い関心を示した 10 大学を選定した。

国内においては、上智大学とお茶の水女子大学、そして静岡県立大学の 3 大学がそれぞれの強みを活かした連携のもと、私立大学、国立大学、そして、公立大学の特徴をそれぞれ活かしながら、また融合しながら、マルチキャンパスでプログラムを展開し、学問分野でも 3 大学が連携することにより、多様な角度から「人間の安全保障・多文化共生」のテーマに取り組んできた。日本語教育では上智大学とお茶の水女子大学が、看護や国際関係学では上智大学と静岡県立大学が、それぞれの強みや実績を共有し、本事業の「協働」学習プログラムをより多層的に実践してきた。

本事業で展開してきたプログラムには以下の 4 つの柱がある。

1 つ目の「COIL を活用したモビリティ・プログラム」では、従来から実施している交換留学や短期プログラムに、COIL を活用した「留学準備・フォローアップ」を組み合わせることにより、渡航前に学生個々の留学に対するモチベーションを大きく高めることができた。参加学生の声として、現地に着いたときに初めて出会う方々に対して、初めて会ったような気がしない、旧友に出会ったときのようにすぐに打ち解け合えた、という感想はとても印象的であった。

2 つ目の「国内循環型の留学生受け入れプログラム」では、国内 3 大学で連携したプログラムを実施した。上智大学で受け入れた留学生が、お茶の水女子大学の日本語科目を履修し、上智大学の単位として認定したり、静岡県立大学主催で、留学生が地方でも学ぶ機会を得る学生交流プログラム「静岡スタディツアー」を実施したりした。静岡県立大学が有する地方自治体・産業界とのネットワークを活かし、日本の多様な社会・文化と産業構造を体感する貴重な機会となった。

以上の 2 つのプログラムを合わせて、派遣、受入ともに、コロナ前は目標数を上回っていたものの、コロナ禍において目標数を下回る結果となった。しかしコロナ禍においても、日米学生のオンライン交流イベントを開催するなど、渡航再開後を見据えて協定大学との学生交流を継続した本事業関係者の努力に感謝したい。

3 つ目の「授業科目への COIL 導入の促進」は、グローバルキャンパス創成の一環として、日米ともに、留学機会を得にくい学習者にも、グローバルな環境での教育機会を提供すべく、事業開始から多彩な分野での導入が進み、実施方法も多層的に発展した。

全学への波及効果の高い全学共通科目や、授業運営の自由度の高い演習科目から優先して導入し、COIL 利用の経験値と COIL を使ったグローバル化の機運を高めると同時に、カリキュラム上、留学機会を得にくい看護学科や、大学院の科目でも積極的に COIL の導入が進んだ。

コロナ禍における授業のオンライン化により授業科目への COIL の導入が進み、同期接続に拘らず多様化するオンライン・プラットフォームを活用する等、オンライン授業に教員や学生が経験値を上げたことも、COIL 促進に繋がったと考えられる。また、学生間での協働作業やより専門的な内容での比較学習に重点をおいた演習科目や少人数科目での導入が進んだ。

一方で、連携大学以外の米国大学または多様な国々の大学との連携も加速し、本事業に限らない全体の COIL 科目数は、2020 年度から 2021 年度では倍以上の実績となり、大きな成果をあげることができた。事業終了後の自走化に向け、教員や科目にとらわれない COIL の導入をいかに円滑に進められるか、先を見据えた組織的な改善と協働を継続的に進めていきたい。

最後の 4 つ目が、「JWL との連携プログラム」である。高等教育へのアクセスが限られている学生への教育機会の提供を目的とし、上智大学の設立母体であるイエズス会の難民支援プロジェクトを元に創設された NPO 団体 JWL (Jesuit Worldwide Learning) の難民支援教育プログラムとの連携を行った。具体的には、2019 年度にミャンマーの JWL サイトと連携し、教育と国際貢献をテーマとしたスタディツアーを実施した。JWL サイト、大学、国際機関等での研修を経て、現地におけるオンライン教育貢献の在り方を参加学生と共に検討できたことは非常に貴重な経験となった。

大学の世界展開力強化事業としての取り組みは 2022 年度をもって終了するが、国内連携 3 大学は、COIL が「学びと教育の自由度の向上、そして多様な国際学修機会の提供」を実現するという共通認識を持っている。国公立大学それぞれの強みをさらに発展させるとともに、互いに学び補い合うべく、その取り組みを共有し、各大学の国際化を加速させるという波及効果を生み出すことが期待される。この事業内で築いた教職員のネットワークは貴重な財産であり、国内 3 大学の連携継続は、今後の COIL 型教育の促進・発展に欠かせないものと考えている。

II. 事業概要・成果報告および今後の展望

「人間の安全保障と多文化共生に係る課題発見型国際協働オンライン学習プログラムの開発」 “COIL Programs for Human Security and Multicultural Coexistence”

上智大学 グローバル教育推進室

1. 事業概要

【交流プログラムの目的及び概要等】

本事業は、オンライン教育（COIL システム）を利用した遠隔教育と交流事業を軸に、日本と米国の二国間の大学間連携を図り、第三国への教育発信を含めた国際高等教育の多層的展開及び学生のモビリティを向上させることを目的とする。今日、国際高等教育には多様な形態があるが、オンライン教育を導入することの意義は、①経済的理由や大学の履修カリキュラムの関係上、留学機会が得にくい学習者に教育機会を提供すること、②文化的背景の異なる多様な学習者が協働学習を行うことにより、課題に対する多面的な理解や複眼的な思考力を習得すること、③留学事前指導等の授業では、相手先からの映像や双方向コミュニケーションを利用した効果的な学びが可能になることにあると考える。本事業ではそれを、人間の安全・安心な暮らしや健康を考える「人間の安全保障」と、多様性の理解や複眼的思考を基盤とした「多文化共生」を軸に課題発見型プログラムとして展開する。

本事業は、日本側は上智大学とお茶の水女子大学ならびに静岡県立大学が、また米国側は協定校を中心とする 10 大学を軸に展開する。各大学がもつ交換留学を土台に、3 大学合同の短期派遣プログラムや言語教育を含めた留学準備・フォローアップの実施、各校のプログラムの特色を生かした課題発見型の授業科目への COIL 導入、さらに国際保健やジェンダー、サステナビリティに焦点を当てた協働学習を展開する。また上智の設立母体であるイエズス会が、すでに難民キャンプを含む世界 25 カ国で 5,000 人を対象に展開している遠隔学習による難民支援教育（Jesuit Worldwide Learning: JWL）のプログラム実践への応用を図る（P16 参照）。

プログラムの開発にあたっては、3 大学でプログラム開発協議会を共同実施し、プログラムの進捗や展開を随時検証しながら進める他、外部から評価者を招いた国際協働教育評価協力者会議を毎年度末に開催し、プログラムの評価と課題を明確にしながら事業を展開する。

さらに COIL の授業利用にあたっては、教員に対する技術指導や TA の役割が重要であることを踏まえ、FD 活動の一環として研修および人材育成につとめ、事業終了後の持続可能性にも配慮する。国立、公立、私立大学が、かつ都市部と地方をつないで行う本事業は、まさに COIL の特徴を活かすものとして、この後のオンライン教育のモデルを提示することを企図している。

【養成する人材像】

本事業では、日米間の学生がオンライン教育および実際の交流活動による協働学習を展開することにより、多様な現実を複眼的な視野に基づいて理解するとともに、英語による協働学習を通じて異文化理解や交渉力、コミュニケーション力を習得し、多文化共生を考える素地を養う。また、プログラム内容からは、地球規模課題を日米双方の視点に立って議論するなかで、現実根差して解決の方向性を模索する問題発見力や課題解決力を養成するとともに、現実社会に含まれる人間社会の安心・安全な暮らしや健康、社会的公正性の問題を具体的に検討する分析力を育成する。さらにグループ学習を基本とすることから、集団における協調性や調整力を養う。こうした力はいずれも、SDGs を達成していくために欠かせないグローバル・シティズンシップ教育の要素を成すものであり、オンライン教育による取り組みが、教育機会普及の実現と次世代教育の可能性を開拓することにつながる意義を示すものである。

2. 成果報告

(1) 交流プログラム

新型コロナウイルス感染拡大の大きな障壁を乗り越えながらの事業展開となり、渡航を伴う交流が難しく交流学生数は目標に届かなかったものの、オンラインによる留学プログラムをいち早く導入し実施したことや学生交流活発化という成果へと実を結んだ。

①学生交流数

【派遣学生数】

			2018年度		2019年度			2020年度			2021年度			2022年度				
目標（年度別合計人数）			21 人		75 人			81 人			89 人			94 人				
実績			26 人		104人 人			40人 人			80人 人			73人 人				
					実渡航	オンライン	ハイブリッド	実渡航	オンライン	ハイブリッド	実渡航	オンライン	ハイブリッド	実渡航	オンライン	ハイブリッド		
			104人	0人	0人	0人	40人	0人	0人	14人	66人	0人	30人	43人	0人			
【交流形態別 内訳】																		
単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流			25 人		82 人	0 人	0 人	0 人	17 人	0 人	0 人	39 人	0 人	10 人	43 人	0 人		
			COIL型教育の 活用有無		有	25 人	72 人	0 人	0 人	0 人	17 人	0 人	0 人	39 人	0 人	10 人	43 人	0 人
					無	0 人	10 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	
単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流			0 人		20 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	14 人	0 人	0 人	20 人	0 人	0 人		
			COIL型教育の 活用有無		有	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	5 人	0 人	0 人	10 人	0 人	0 人	
					無	0 人	20 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	9 人	0 人	0 人	10 人	0 人	0 人
上記以外の交流期間3ヶ月未満の交流			1 人		2 人	0 人	0 人	0 人	23 人	0 人	0 人	27 人	0 人	0 人	0 人	0 人		
			COIL型教育の 活用有無		有	1 人	2 人	0 人	0 人	23 人	0 人	0 人	27 人	0 人	0 人	0 人	0 人	
					無	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	
上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流			0 人		0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人			
			COIL型教育の 活用有無		有	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	
					無	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	

【受入学生数】

	2018年度		2019年度			2020年度			2021年度			2022年度			
目標（年度別合計人数）	3 人		22 人			23 人			36 人			36 人			
実績	5 人	47人 人			0人 人			7人 人			20人 人				
		実渡航	オンライン	ハイブリッド	実渡航	オンライン	ハイブリッド	実渡航	オンライン	ハイブリッド	実渡航	オンライン	ハイブリッド		
		47人	0人	0人	0人	0人	0人	2人	5人	0人	16人	4人	0人		
【交流形態別 内訳】															
単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流		有		1人	4人	0人	0人	0人	0人	0人	3人	0人	0人	4人	0人
		無		0人	14人	0人	0人	0人	0人	0人	1人	0人	0人	0人	0人
単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流		有		0人	5人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	5人	0人	0人
		無		4人	24人	0人	0人	0人	0人	2人	1人	0人	11人	0人	0人
上記以外の交流期間3ヶ月未満の交流		有		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人
		無		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人
上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流		有		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人
		無		0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人

②派遣プログラム（COIL を活用したモビリティプログラム）

従来から実施している交換留学や短期プログラムに、COIL を活用した留学準備・フォローアップや、学生同士のオンライン交流を組み合わせることにより、留学効果を高め、渡航前の学生個々の留学に対

するモチベーション向上に繋がった。国内 3 大学合同で語学講座（カリフォルニア大学デービス校）の事前講義を COIL で実施するほか、お茶の水女子大学では「国際学生フォーラム」にてオンラインと渡航を有機的に組み合わせたプログラムが展開されている（P10 参照）。

国内 3 大学合同ゴンザガ大学オンラインプログラム

2020 年度より開始した国内 3 大学合同で米国ゴンザガ大学と連携したプログラム（P9 参照）では、秋学期授業期間中に国内大学での COIL 型合同講義やゴンザガ大学の講義を実施するとともに、ゴンザガ大学学生とのディスカッションも通して、ジェンダーに関する各論と、国内・アジア・日米の比較を行った。それらの事前講義を踏まえて、春期休暇中にゴンザガ大学がオンラインで提供する集中講座では、包摂的リーダーシップに関するより実践的な講義を受講する。尚、本プログラムは、3 大学連携を継続するため、経済的な負担を軽減できる方法で幅広い参加学生が 3 大学から集まるよう、また、専門トピックにおける講義と意見交換を主とするプログラムにつき、オンライン実施でも十分な学習効果が見込まれる点を考慮し、3 大学合同での効果的な実施を目指し、事業終了後もオンラインで継続する予定である。

③受入プログラム（国内循環型留学生受入プログラム）

本プログラムでは、A)上智大学とお茶の水女子大学、B)上智大学と静岡県立大学でそれぞれ連携したプログラムを実施した。

A)お茶の水女子大学の日本語科目を上智大学で受入れた留学生が履修し、本学の単位として認定する制度では、3 名の学生がお茶の水女子大学で実際に授業に参加。

B)静岡県立大学主催で、留学生が地方でも学ぶ機会を得る学生交流プログラム「静岡スタディツアー」を実施（P14 参照）。静岡県立大学が有する地方自治体・産業界とのネットワークを活かし、日本の多様な社会・文化と産業構造を体感する機会として、上智大学の受入留学生 13 名（2019 年度 8 名、2022 年度 5 名）の参加とともに、静岡県立大学の日本人学生や受入留学生も合流した。

（2）授業科目への COIL 導入

グローバルキャンパス創成の一環として、日米ともに、留学機会が得にくい学修者にも、グローバルな環境での教育機会を提供すべく、事業開始から多彩な分野での導入が進み、実施方法も多層的に発展した。

①COIL 導入促進の背景と経緯

事業開始当初は、全学への波及効果の高い全学共通科目や、授業運営の自由度の高い演習科目から優先して導入し、COIL 利用の経験値と COIL を使ったグローバル化の機運を高めると同時に、カリキュラム上、留学機会が得にくい看護学科（P12 参照）や、大学院の科目でも積極的に COIL が実践された。また、コロナ禍における授業科目のオンライン化により COIL 導入が急速に進み、同期接続に拘らず多様化するオンラインプラットフォームを活用する等、COIL 型手法の内容も多様化し、導入する学科（学問分野）も広がった。継続するコロナ禍におけるオンライン授業に教員や学生が経験値を上げたことも、COIL 促進に繋がったと考えられる。但し、学生間での協働作業や、より専門的な内容での比較学習を強化する上で、海外大学とオンライン連携しながら円滑かつ効果的な授業進行を行えるよう、演習科目や少人数科目での COIL 導入が目立ったこと、また、各大学での対面授業再開によるハイフレックス対応の授業に対するハードルや、実渡航再開により対面での連携にシフト、連携大学とのスケジュールが合わないなどの課題があり、科目数、受講者数ともに目標達成には至っていない。一方、本事業運営により得た経験を元に、連携大学以外の米国大学または多様な国々の大学との連携も加速し、本事業に限らない全体の COIL 科目数は、2020 年度から 2022 年度にかけて倍以上に増え、大きな成果をあげた。

②科目数・受講者数

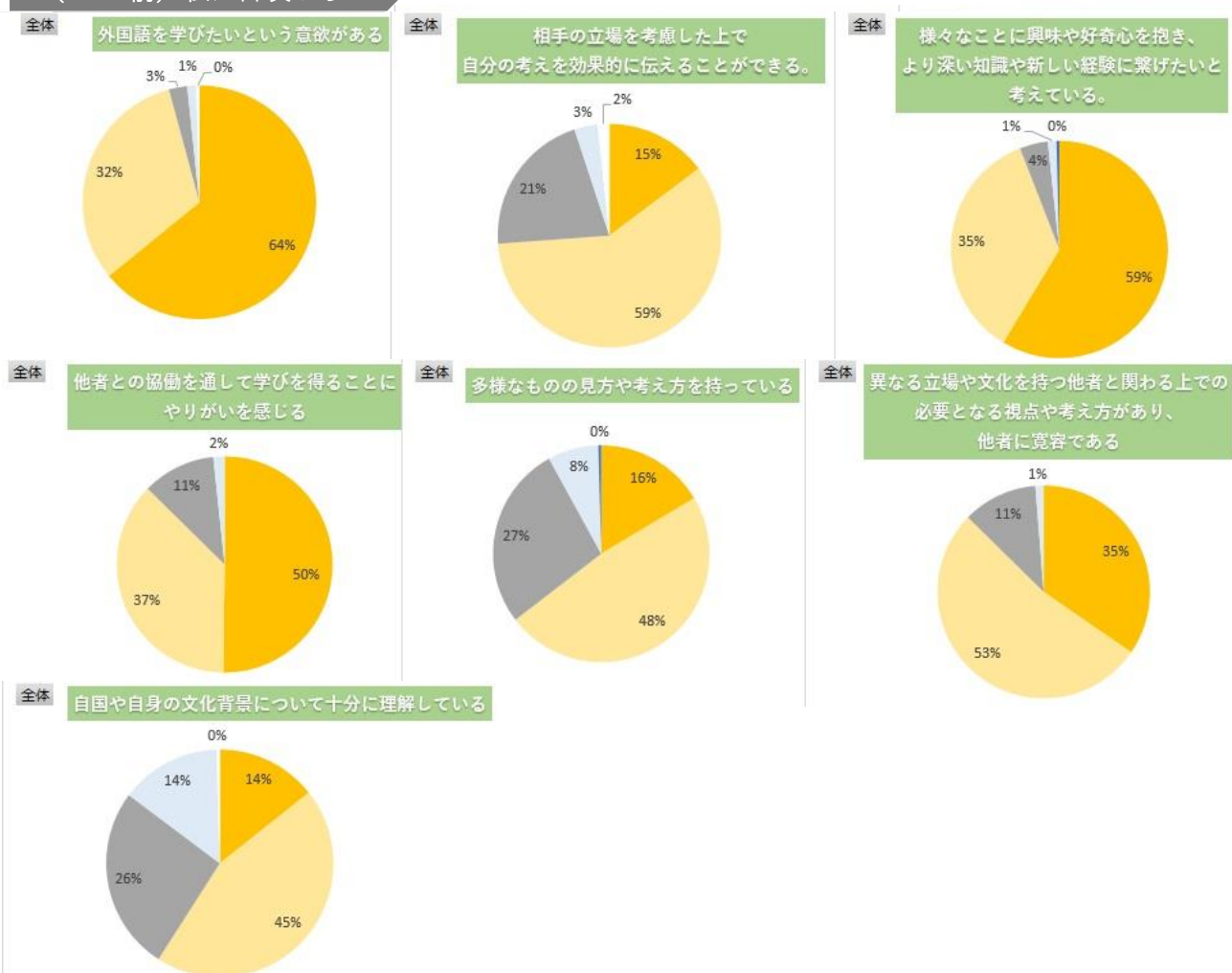
目標	2018	2019	2020	2021	2022
本事業における COIL 型教育手法を 活用した授業科目数	6	15	26	37	48
大学全体の COIL 型 教育手法を活用した 授業科目数 (A)	6	15	26	37	48
全授業科目数 (B)	9692	9692	9692	9692	9692
割合 (A/B)	0.1%	0.2%	0.3%	0.4%	0.5%
本事業における COIL 型教育の受講 者数 (日本人学生)	220	640	1045	1450	1855
本事業における COIL 型教育の受講 者数 (外国人学生)	30	60	100	140	180

実績	2018	2019	2020	2021	2022
本事業における COIL 型教育手法を 活用した授業科目数	10	25	28	41	38
大学全体の COIL 型 教育手法を活用した 授業科目数 (A)	16	29	56	123	113
全授業科目数 (B)	10540	11047	11089	11080	10973
割合 (A/B)	0.2%	0.3%	0.5%	1.1%	1.0%
本事業における COIL 型教育の受講 者数 (日本人学生)	328	422	479	821	775
本事業における COIL 型教育の受講 者数 (外国人学生)	25	27	10	59	39

③COIL 受講学生の学習効果測定

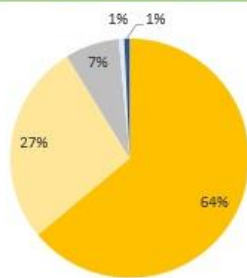
2022 年度秋学期に、COIL 受講学生の学習効果を測定するため、COIL 授業の受講前後にアンケートを実施（COIL 導入教員に協力依頼の上、任意回答で集計）。グローバルコンピテンシーを指標とする 7 項目において、学生の自己認識を測る内容で、複数科目で COIL の経験が学生の意識や能力向上に繋がったことが分かる。

(COIL 前) 私は日頃から…

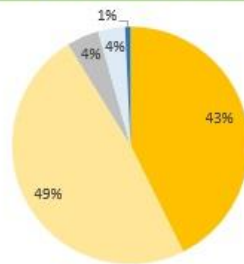


COIL に参加したことで…

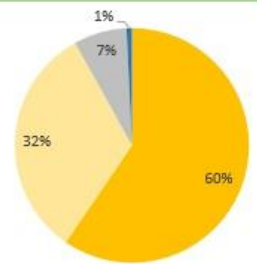
全体 自身の外国語学習意欲がより高まった



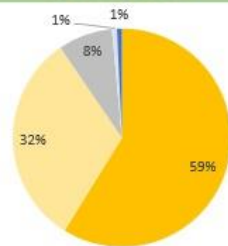
全体 相手の立場を考慮した上で、自分の考えを効果的に伝えることができたようになった



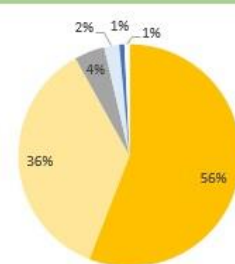
全体 様々なことに興味や好奇心を抱き、より深い知識や新しい経験に繋がりたいと考えようになった。



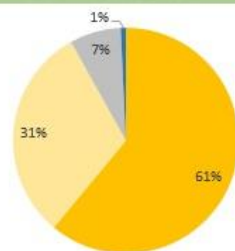
全体 他者との協働による学びを得ることにやりがいを感じた



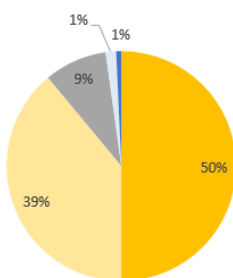
全体 知識を相互に結びつけることにより、多様なものの見方や考え方が身についた。



全体 異なる立場や文化の教員／学生と関わることにより、そうした他者と関わる上での必要となる視点や考え方、他者への寛容性が身についた。



全体 自国や自身の文化背景について理解が深まった



(3) プログラムの質保証

①大学間交流の枠組形成に向けた取組

国内3大学で互いの知見を共有し、より質の高いCOIL型教育の実施とより強固な連携へと繋げるため、事業責任者が一同に会するプログラム運営協議会を定期的開催した。また、国内3大学合同のワーキンググループを設置し、これまでに実施したCOIL導入科目の事例を振り返るとともに、その成果としてCOIL導入にあたるガイドラインとなる動画・冊子を作成。その過程では、シアトル大学よりゲストを招き、米国でのCOIL事例や留意点などを学ぶとともに意見交換を行うことで、日米間のCOIL実施について比較できる貴重な機会となった。さらに、定期的にFDも実施し、多様化する授業形態におけるCOILの実践経験や課題を共有し、国内3大学合同で実施した研修では、COIL担当教員がそれぞれの経験をもとにCOIL導入にかかる課題や必要なステップを指導。その他、米国のCOIL第一人者であるJon Rubin氏や、高等教育の質保証を専門とするボストンカレッジ教員による講演会を開催したり、上智大学教員が米国連携大学の教職員向けに、多様性をテーマとした日本とのCOIL導入にかかる課題や知識について共有する機会を設けたりした。

②外部有識者によるプログラム自己評価・点検

毎年度末に外部有識者を評価者に招いた「国際協働教育評価協力者会議」を開催。事業全体の進捗への講評に加え、COIL 型教育の質保証、組織としての取り組み、国内 3 大学連携や社会へ COIL の意義を発信することの重要性などについて助言を得ることで、翌年度のプログラム改善と発展へと繋げた。また、世界的な共通課題として、オンライン留学や COIL の学習効果、コロナ前後における COIL の意義の変化などについて議論を共有することで、事業終了後に向けた展望に対する視座を高め具現化することができた。

(4) 事業の実施に伴う情報の公開、成果の普及

事業期間を通して、複数媒体での情報公開や冊子出版による成果発信に努めた。COIL 事業案内冊子をはじめ、日米の担当教員が自身の COIL 事例について執筆した COIL 実践のグッドプラクティスをまとめた英語版パンフレットでは、参加学生や担当教員の実体験を盛り込んだ。また、大学全体で COIL を促進するためのツールとなる導入ガイド(動画・冊子)では、概要や事例紹介にとどまらず、実際に COIL を導入するために必要なステップや留意点を詳細に記載することで、国内 3 大学内のみならず、米国連携大学にも共有し、COIL の機運を互いに高めることに効果を上げた。その他、お茶の水女子大学、静岡県立大学ともに、COIL 専用ウェブサイトを構築し、各科目での導入実績や関連する取り組みを学内外に公開している。

(5) 国内 3 大学連携と今後の展望

「学びと教育の自由度の向上、多様な国際学習機会の提供」を実現する COIL の高い学習・教育効果を継続的に普及するためにも、COIL の自走化は必要不可欠であり、今後も各大学における全学的な実践と発展ならびに本事業で培った連携の継続に取り組む。

- ▶各学部学科の教員の強みやネットワークを生かした取り組みへの注力とともに新規導入教員の開拓と研修、教育による促進
- ▶米国連携大学以外のパートナー開拓と連携強化、海外大学に限らない国内 COIL の実施
- ▶国公立大学それぞれの強みを生かした取り組みの共有と波及効果の生成、本事業内で築いた教職員ネットワークによる協働
- ▶3 大学合同の米国ゴンザガ大学オンラインプログラムの継続と発展

III. COIL 科目・プログラム報告

1. お茶の水女子大学の上智大学・静岡県立大学・ゴンザガ大学との交流授業 (3大学合同 ゴンザガ大学オンラインプログラム)

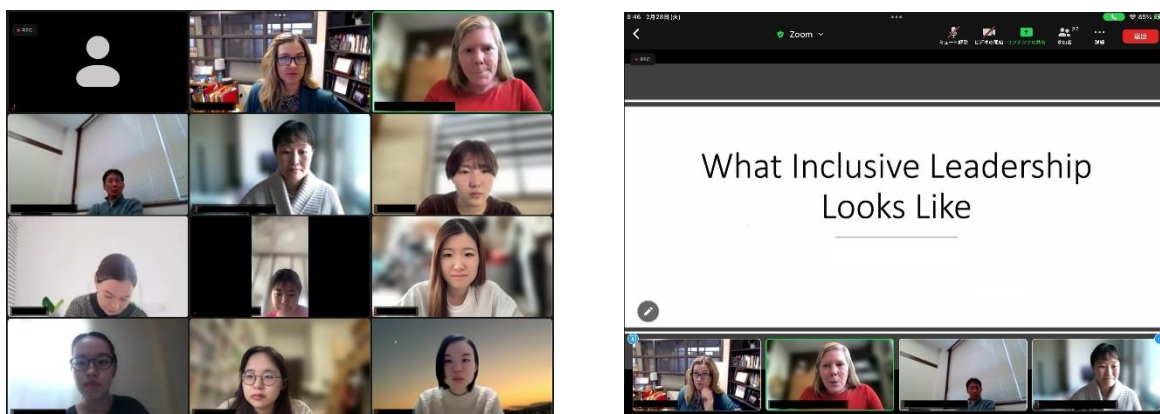
お茶の水女子大学 教授
小林 誠

お茶の水女子大学が上智大学・静岡県立大学と行ったCOILによる交流授業は、2020年度、2021年度、2022年度、いずれも後期に開催した。当初、2020年度の3月にはゴンザガ大学訪問を含む実渡航による米国ワシントン州実習10日間を準備していたが、コロナのために実現せず、その後の2021年度と2022年度も含め、ゴンザガ大学の提供するオンラインプログラムへの参加となった。

まず国内3大学はそれぞれ授業の開講時間が異なるため、午後の90分のうちの最初と最後をオープンにし、おのおのの授業形態を柔軟に運用しながら、各大学の学生参加を促した。お茶大はアドホック開講に利用される「総合コース」という科目名を使用し、全学科目とした。3年間ともおおよそダイバーシティ、リーダーシップ、ジェンダーといったテーマで共通開講し、3大学教員がそれぞれ専門の授業を行った。英語による専門教育の意味を含めて授業ではパワポを英語にした回もあった。次いで北米との時差を考慮して午前にゴンザガ大との交流を行った。お茶大教員の提供した回では3年間それぞれに"Gender and LGBT Problems in Asia and the World", "Gender and Leadership in Japan", "Gender Equity and LGBT Problems in Asia" と題された授業が行われた。

その後、お茶大と上智大の学生のグループワークを行わせ、1月のワークショップ（ハイブリッド開催）で個別テーマの研究を発表させた。他大学学生と議論することは、受講生には新鮮で実り多い試みであった。その後、2月末から3月にかけての午前中3時間×5日間集中のゴンザガ大学オンラインツアーに参加した。ゴンザガ大学のプログラムはInnovative & Inclusive Leadership (2020年度)、Inclusive leadership (2021年度と2022年度) と題され、多くの講師やゲストスピーカーが登壇し、日本人学生の理解度を確認しながら積極的に議論させるしくみが組み込まれ、よく組織されたものだった。社会的関連（たとえば企業、教室、国会、軍隊など）から遊離させて人間の素質や抽象的な人間関係だけで論じるかなり北米的な普遍主義的リーダーシップ論ではあるが、それでも学ぶことは多い。ダイバーシティの議論のあり方そのものが日米で異なることが学生は理解できただろうし、交流授業で積極参加することでリーダーシップの実践的学習ともなっただろう。3時間のうちに休憩が1回入るとは言え、英語のみで受講し続けるのは学生にはかなりタフな経験だが、洗練された専門的知識を英語を通じて学ぶ本格的な学習の機会であった。

お茶大の受講生数は安定して増加し、2022年度実績では前半受講者23人、ゴンザガ大ツアー受講者14人であった。



2022年度実施時の様子（2023年3月）

III. COIL 科目・プログラム報告

2. お茶の水女子大学 国際学生フォーラム

お茶の水女子大学 教授／国際教育センター長
森山 新

第9回フォーラム（ヴァッサー大学）

1. 国際学生フォーラムとは

国際学生フォーラム（以下フォーラム）は、世界8か国の大学と2009年に結成された「多文化・多言語サイバーコンソーシアム」を基盤に2012年から毎年行われ、COIL採択後はアメリカの協定校ヴァッサー大学との間で実施された。フォーラムは「グローバル化と言語教育Ⅰ」（担当：森山）として開講されている。このフォーラムは東日本大震災を契機に世界的課題に世界の若者はどう立ち向かうかを話し合う場として始まった。本事業採択以降は、2019年度（2020年2月、第9回）は「環境問題」をテーマにオンラインでの事前学習ののち、ヴァッサーでフォーラムを開催した（2月16日～25日）。その後コロナ禍故に実渡航が困難となり、事前学習、フォーラムを含め、全てがオンラインで開催された。2020年度（2021年3月、第10回）は「COVID-19」、2021年度（2022年2～3月、第11回）は「平和教育を考える：第二次世界大戦と日米関係」で開催され、2022年度（2023年2～3月、第12回）は「多様性と包括性」をテーマに開催された。毎年両大学より20人前後の学生が集い、日本側学生は英語で、米国側学生は日本語で発表や討論に参加した。



2. 国際学生フォーラムがめざすもの

本フォーラムはByram（2008）の掲げる間文化的シティズンシップ教育としての外国語教育の理念に賛同し、言語教育（複言語・複文化教育）とシティズンシップ教育を融合、以下のような目的を有して実施されてきた。

- ① 複言語・複文化主義：互いに相手の言語を用いて発表や討論に参加することで、言語・文化・価値観などの違いを克服し、問題解決、平和のための対話を実現する。
- ② 学生主体の協働：国際イベントを異なる国から集まった学生の手で建設する経験とスキルを身につける。
- ③ 間文化的シティズンシップ教育：民主的文化のための能力を育み、世界市民として今の社会の諸問題に取り組む。

3. 授業日程

本授業は事前学習とフォーラムを含め、おおよそ以下のような日程で実施されてきた。10月から2月までの事前学習では日米の学生が合同でグループを結成し、それぞれのテーマを決め、発表の準備を行う。互いの言語を教え合いながら発表の準備をする中で、それぞれの異なる文化、価値観、考え方の違いを学ぶと同時に、センシティブな内容も忌憚なく話し合えるための信頼関係を構築していく。フォーラムまでは各グループの主体性が重視される自律学習の場になる。両国の教員による特別講演なども実施され、専門知識を深めていく。

10月 説明会の開催 事前授業開始

11月～2月 グループごとにサブテーマを決め、SNSなどを活用し交流と発表準備を行う

- ①語学スキルの向上と異文化理解
- ②外国語によるプレゼンテーションスキル向上

III. COIL 科目・プログラム報告

- ③交流を通じてセンシティブな問題も話し合える信頼関係を構築
- ④自立性、主体性育成
- ⑤日米教員によるオンライン講演会の開催

2月 国際学生フォーラムの開催

4. 成果

このようなフォーラムでは以下のような様々な成果が報告されている（詳しくはそれぞれの成果を発表した参考文献を参照のこと）。

- ・互いの言語を用い、世界の諸問題について発表、国際的、学際的議論が行われた。
- ・世界の諸問題を自身の問題として捉え、高等教育におけるシティズンシップ教育として貢献した。例えば第11回フォーラムでは、戦争相手国として歴史的記憶が相反する第二次世界大戦を取り上げ、平和教育を再考したが、20項目からなる「民主的平和のための能力」のそれぞれにおいて大きな効果が上がったことが明らかになっている（森山、2023）。
- ・（コロナの代替手段としてでなく）ZOOMを用いることで、日常的に講演や合同授業開催の可能性について話し合われた。

5. 感想

学生からは以下のような感想が上がっている（詳しくは各年度報告書 <https://www.li.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/2.html> を参照のこと）。

- ・オンラインでのバディとの交流がフォーラムでの発表の改善、交流の深化につながった。
- ・複言語・複文化環境で発表・交流することで、複言語・複文化スキルが向上し、視野やアイデンティティが広がった。
- ・海外（アメリカ）での学びは日本での学びと異なる。留学につなげ、学びを深めたい。
- ・同じ環境・平和問題でも、国や学問領域によって捉え方、対応の仕方が全く異なり、興味深い学びになった。
- ・半年間の交流により「民主的文化のための能力」が高まった。
- ・学生主導にすることで市民意識やリーダーシップが培われた。
- ・今回の出会いを大切に、今後も交流を続けたい。

参考文献

Byram, M. (2008). *From foreign language education to education for international citizenship*.

Multilingual Matters. (邦訳:バイラム・マイケル (2015) 『相互文化的能力を育む外国語教育－グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店)

森山新 (2021) 「間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析：民主的文化のための能力の参照枠 (RFCDC) の観点から」『人文科学研究』, 17, 25-38 (論文)

森山新 (2022) 「間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析：政治教育的側面、及び複言語・複文化教育の側面からの考察」『人文科学研究』, 18, 55-68 (論文)

森山新 (2023) 「間文化的シティズンシップ教育としての第11回国際学生フォーラム：民主的文化のための能力の参照枠を尺度として」『人文科学研究』, 19 (近日刊)

森山新, シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析: コスモポリタン・シティズンシップの観点を中心に, シティズンシップ教育研究大会2020, 2020/10/4, オンライン (口頭発表)

III. COIL 科目・プログラム報告

3. 上智大学 世界の看護学生とのグローバルな学びの共有

上智大学 総合人間科学部看護学科准教授
吉野 八重

看護学科では、米国（マルケット大学、ポートランド大学、ボストンカレッジ、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、オレゴン保健科学大学）、モンゴル国立医科大学、タイ王立コンケン大学、静岡県立大学の看護学部と協働した。本科目の目的は、①異文化適応能力、多文化共生に必要な知見、Cultural humilityの体得、②海外学生との共学体験を通じた語学学習への動機付け、③プレゼンテーション力、リーダーシップ力、マネジメント能力、既存資源の発見と活用、④日本の保健医療、看護の問題や課題の客観的な学び直し、新たな視点の獲得、⑤英語プレゼンテーションによる自己効力感、自己肯定感の獲得、⑥文化や国境を越えた看護職の役割や使命の考察とした。3年間で計30回実施したCOIL授業のトピックスは、社会的弱者の保健医療アクセス、終末期医療、看護倫理、キャリア開発、在宅医療、COVID-19、保健医療システム、リプロダクティブヘルス（若者の避妊、性教育）など多岐に渡った。

授業形態は、①海外講師のオンライン講義視聴型、②日本人学生から米国人学生へのプレゼンテーション型、③保健医療・看護関連の各国の実情と問題、課題に関するプレゼンテーションと質疑応答、④日米合同の事例展開型授業（バーチャルでディスカッション中心、通訳なし。カリフォルニア大学ロサンゼルス校の通常授業に参加する形で大量の英語文献の購読と事前学習が必要）に大別され、学生のコミュニケーション能力に応じた準備と細かい対応が必要であった。必修科目（英語力のばらつき大）では、事前に講義資料を日本語に翻訳して配布し、当日は逐語通訳を行った。また関連用語の日本語解説資料を作成して配布、参考文献やビデオの事前課題を提示し、各自で質問を考えて授業に臨むよう促した。選択科目履修者は、比較的語学能力が高い傾向が見られた。事前に学生の語学レベルを把握した上でオンライン授業当日は必要に応じた日本語のサマライズ、理解を確認しながらファシリテートすることが重要であった。

学生の反応は、「米国内の健康格差、医療現場での人種差別への驚き」、「開発途上国の人々の健康問題の背景にある生活習慣や環境、文化、価値観を学び理解する重要性への気づき」、「異文化や言語の壁を超えた専門職としての共通の使命感、同じ目標を持つ仲間と悩みや困難感を共有できて勇気が出た」、「もっと英語を勉強し世界の人たちと対話し、共に成長したい」、「自国の医療・看護の学びが深まり、客観的・多角的に捉えることができた」、「海外の学生と友達になり、SNS上で常に繋がることができ嬉しかった」などと肯定的な反応が見られ、今後のCOIL授業継続への強い希望が示された。

COIL 実施時の各大学の授業風景

（左上：上智大学、右上：静岡県立大学、
左下：米国ポートランド大学、右下：
モンゴル国立医科大学看護学部）



III. COIL 科目・プログラム報告

4. 静岡県立大学「日本語学演習」と ノースカロライナ大学シャーロット校「日本語」科目との交流

静岡県立大学 国際関係学部教授／国際交流センター長
澤崎 宏一

静岡県立大学の「日本語学演習」と、ノースカロライナ大学シャーロット校の「日本語」の授業間で、日本語と英語を用いて行った交流活動である。「日本語学演習」は日本語の第二言語習得を授業テーマとしており、日本語学習者と日本語で交流することは、授業の趣旨に沿うものであった。また、英語も使用することで、日本の学生の英語力向上にも役立った。

表に示すとおり、交流は4年の間行われた。活動はすべて授業時間外におこなう課題の扱いである。初年度の2019年は手探りの状態で、メーリングリスト（ML）やFlipgridでの情報交換のみであったが、翌年からはZoomでの同期交流を加え、日米合同でプレゼンテーションをおこなうところまで発展させた。また、2021年には、米国の春・夏・秋学期に合わせて、計3回もの交流を実現した。

活動には困難もあり、日米間の時差が同期交流には大きな問題だった。何週間にもわたってすべての学生が等しくモチベーションを保つことも難しかった。

しかしながら、一連の活動を続けることにより、教員が当初期待していた以上に交流が盛り上がりを見せたこともある。また、はじめは相手の出方をうかがって情報発信を躊躇していた日本の学生に、少しずつ積極性が芽生えていくような場面も見られた。COIL活動は、難しさはあるが、継続していくことでその効果を高めていくことができるといえるだろう。

活動の概要

	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年
期間	秋 8 週間	秋 10 週間	春 4 週・夏 5 週・ 秋 10 週間	春 4 週・ 秋 10 週間
日本参加人数	11	13	春 12 夏 12 秋 12	春 10 秋 10
米国参加人数	18	18	春 16 夏 12 秋 21	春 13 秋 15
活動方法	非同期 グループ活動	非同期+同期 グループ活動	非同期+同期 グループ活動	非同期+同期 グループ活動
使用ツール	ML・Flipgrid	Padlet・Zoom	Padlet・Zoom	Padlet・Zoom

なお、交流の成果は以下の文献でも発表している。

加藤富美江・澤崎宏一（2022）「悪条件下での COIL：春学期の日米交流授業」

『Proceedings of the 37th Annual Conference Southeastern Association of Teachers of Japanese』（pp. 8-18）

澤崎宏一・森千加香（2023）「英語学習者と日本語学習者による COIL 活動 ―日米間協働学習の効果―」大瀧綾乃・須田孝司・横田秀樹・若林茂則夫（編）『第二言語習得研究の科学 ―2 言語の指導―』（pp. 165-184）くろしお出版

澤崎宏一・横野由起子（2021）「海外日本語クラスとの COIL 型授業交流 ―2019 年度 UNC Charlotte との日本語 COIL―」『国際関係・比較文化研究』、20(1)、95-112

III. COIL 科目・プログラム報告

静岡スタディツアー

静岡県立大学 国際交流室

令和元（2019）年8月及び令和2（2020）年2月の2回、米国連携大学等からの上智大学受入留学生と静岡県立大学学生が県内の企業等を訪問する静岡スタディツアーを2泊3日で実施した。また、公益社団法人静岡県国際経済振興会（SIBA）の協力により、県内企業を訪問する意義や訪問先の知識について、理解を深めるための事前学習を行った。

その後、新型コロナウイルス感染拡大により一時中断していたものの、令和5（2023）2月に、感染防止に配慮のうえ、日帰りで再び実施した。

いずれのスタディツアーも、農業・製造業・伝統工芸など多様な産業と歴史を有する静岡県の特色ある企業等への訪問を通じ、日本の経済・文化・歴史に対する理解や自国との比較学習等を促進することを目的とした。また留学生のコミュニケーション支援やガイダンス役として参加した静岡県立大学の日本人学生にとっては、各国学生との交流を通じて地域に対する理解を深めるとともに、地元での就職や伝統文化の継承に向けた動機づけを与える機会となった。

1 実施概要

第1回	
日程	令和元（2019）年8月5日(月)～7日(水) 2泊3日
参加	留学生4名、日本人学生4名、教職員5名、SIBA1名〔計14名〕
訪問	ふじのくに茶の都ミュージアム（島田市）：茶道体験 杉本製茶(株)（島田市）：抹茶パウンドケーキづくり体験 パイフォトニクス(株)（浜松市東区）：ホロライト実演 ヤマハ(株)イノベーションロード（浜松市中区）：企業ミュージアム見学 ヤマハ(株)掛川工場（掛川市）：ピアノ工場見学 富士山本宮浅間大社、静岡県富士山世界遺産センター（富士宮市）：見学 臼井国際産業(株)協和工場（駿東郡清水町）：ディーゼルエンジン燃料噴射管生産 工程見学、社員との意見交換

第2回	
日程	令和2（2020）年2月12日(水)～14日(金) 2泊3日
参加	留学生4名、日本人学生5名、教職員6名、SIBA2名〔計17名〕
訪問	ヤマハ(株)イノベーションロード（浜松市中区）：企業ミュージアム見学 ヤマハ(株)掛川工場（掛川市）：ピアノ工場見学 興津螺旋(株)（静岡市清水区）：工場見学 駿府匠宿（静岡市駿河区）：伝統工芸品づくり〔駿河竹千筋細工〕体験 (有)みやび行燈製作所（静岡市葵区）：駿河竹千筋細工工房見学 富士山本宮浅間大社、静岡県富士山世界遺産センター（富士宮市）：見学 矢崎総業(株)（裾野市）：自動車部品工場見学

III. COIL 科目・プログラム報告

第3回	
日程	令和5（2023）年2月22日(水) 日帰り
参加	留学生10名、日本人学生3名、教職員4名、SIBA2名 [計19名]
訪問	久能山東照宮、同博物館、日本平（静岡市駿河区）：国宝見学等 (株)アイエイアイ（静岡市清水区）：産業用小型ロボット製造見学 清水コンテナターミナル(株)、鈴木(株)コンテナターミナル部（静岡市清水区）： 清水港新興津国際貿易コンテナターミナル・物流システム見学

2 参加学生の感想

ツアー終了後、参加留学生にアンケート調査を行い、どのような点に意義を感じたか等について聞いたところ、「駿河千筋細工など日本固有のものに魅力を感じた」「匠の職人技は、自分の将来のビジネス像に一石を投じた」「静岡の学生との交流に意義を感じた」などの意見が聞かれた。

また、同じく参加した日本人学生からは、「静岡の企業・産業を留学生と一緒に学ぶことで、色々な新しい視点をお互いに得ることができた」「英語に萎縮せずチャレンジしてみることが大切だと思った」「留学経験がなく、外国人とずっと一緒に行動するのは初めてだったが、英会話にチャレンジした結果、大変貴重なツアーとなった」などの声が寄せられ、参加した留学生だけではなく日本人学生にとっても、その後の活動にポジティブな影響をもたらす機会になったと考える。



矢崎総業(株) (2020年2月)



清水コンテナターミナル(株) (2023年2月)

III. COIL 科目・プログラム報告

Jesuit Worldwide Learning (JWL) 連携プログラム

上智大学 グローバル教育センター特任助教
李 ウォンギョン

オンラインで様々な情報を無料で得ることができる今の時代、高等教育がなしうことは、単に知識を伝えるだけではなく、学生個人が自分の周りで当たり前として考えている壁を飛び越え、社会の多面性を再認識すること、また、彼らに多文化共生社会へ道を示すことであると考えている。その過程でCOIL教育は、グローバル人材として必須的なICTリテラシーを高めることと共に、自分の壁を越えて現在のグローバル社会、特にデジタル化している社会をより深く理解する機会を提供できると思われる。

本学の設立母体であるイエズス会の最近の教育活動においては、積極的にICTを活用している。グローバル教育センターもその流れを受け、関連活動に参加するほか、独自のプログラムの開発に関わっている。COILプログラムとしては、イエズス会のJesuit Worldwide Learning(JWL)と連携してきた。

JWLとは、イエズス会の難民支援プロジェクトを元に国境を越えた教育格差を解消するために創設されたNPO（非営利団体）で、世界各地の難民キャンプ、教育機関、コミュニティセンター等を拠点として、オンライン授業や大学学位取得課程を開講している。そのカリキュラムの開発と運営は、イエズス会系大学ネットワークが中心になって成立しており、主に米国大学の教員が講義や学生へのフィードバックを提供している。受講者は難民からJWLプロジェクトサイトの近所に居住する一般学生まで様々である。本学は高等教育へのアクセスが限られている学生への教育機会の与えると共に、本学の学生が世界の教育格差の現状を認識し、国境を越えた教育格差の解消に何が必要かを考える機会の提供を目標とした。

まず、教職員および学生のグローバルな教育格差に対する理解促進を進めるべく、2019年度には教育開発をテーマとしてミャンマースタディーツアーを実施した。ミャンマーにあるJWLプロジェクトサイト2ヶ所へ上智大学の学生たちを引率し、見学と共同授業を行った。また、現地の大学、国際機関等での研修を経て、同地におけるオンライン教育貢献の在り方を参加学生達と共に検討した。開発途上国であるミャンマーの中でも最大都市であるヤンゴンだけではなく、地方であるタウンジーのICT環境の現状確認や、JWL課程の受講者の声を聴いてCOILを活用した高等教育の課題について考える機会を持った。新型コロナウイルス感染症とミャンマー現地情勢の影響により2021-2022年度は中止せざるを得なかったが、再開を検討しながらミャンマー以外の連携先や、国際機関・NGO等との連携についても可能性を探りたい。

また、本学のCOIL経験・ミャンマースタディーツアーの経験などを基にした教育貢献の可能性についても、JWL本部とイエズス会系海外大学などと模索している。JWLプロジェクトサイトへのオンライン講義発信についても、長期的な難民等支援を視野に入れて、JWL本部と本学教職員間の会議を数回実施してきた。難民キャンプ内のコロナ感染状況の悪化などで2回延期されたが、2022年3-5月の学期にて、東アジアの大学教員としては初めてJWLのオンライン学位課程「Liberal Studies」の必須科目「Introduction to Political Thought」を担当することができた。担当学期の受講者は、ケニア・マラウイ・ヨルダン・インド・スリランカのJWLプロジェクトサイトからの25人で、アフガニスタン・スーダン・南スーダン・エチオピア・ソマリアなどから逃げ出して難民キャンプで居住している受講生が多かった。出身地域の政権や国際政治に関して非常にクリティカルだった受講生へ政治学の概論を教えることに重責を感じたが、日常生活では出会えない異なる文化圏からの受講生同士がオンラインでつながり、共通の問題に関してのProblem Based

III. COIL 科目・プログラム報告

Learningを実施し、学びを深めることもあった。対面では発言しにくい内密な経験や悩みに関しても、オンラインでの関わり、また、ネットの匿名性を利用した掲示板での書き込み活動を入れることで、講義期間を通じて参加者がより能動的に参加する様子が見られた。

上智大学で担当していたCOIL科目の経験をJWLの受講者へ伝える試みもあった。上智での講義内容と課題の一部をJWLのエッセイ課題として課し、各々の答えを比較する機会を持った。また、政治学としての科目目標に加えて、PC活用能力を高めることや、SNSでのプライバシー保護、ネット上で多国語で検索・フェイクニュースを見抜くことでより信頼度の高い情報源を見つける方法など、より高いICTリテラシーを身につけることも目標とした。グループワークとして、クラウドや掲示板を活用して協働作業を行うことが多いため、受講生がICT関連用語を学んだり、デジタル時代の業務スタイルやグローバルスタンダードに慣れたりする成長も見られた。

今後は、JWLでの経験を、本学とCOILパートナー大学で共有する予定である。本学の大学院科目である「Peacebuilding Seminar」ではJWLの受講者とのCOILを通じて、紛争の経験を伝え平和構築の必要性に関して議論することを考えている。また、この経験を米国COILパートナー大学の教員と共有し、高い関心を示したゴンザガ大学、シアトル大学、ボストンカレッジなどイェズ会大学の教員と、今後、日米とJWL間の連携によるCOILを実施することも計画している。



2019 年度実施時の様子（2020 年 2 月）



IV. 総括シンポジウム報告

1. プログラム

日時：2022年12月15日(木) 10:00～13:00

会場：上智大学四谷キャンパス 2号館 17階 1702 国際会議場※ハイフレックス開催（対面／オンライン）

9:30	開場
10:00-10:15	開会挨拶：曄道佳明 上智大学学長 ご挨拶：渡辺栄二様 文部科学省 高等教育局 参事官（国際担当）
10:15-11:00	第1部：成果報告 1-1：事業5年間の成果報告 - 伊呂原隆 上智大学学務担当副学長 1-2：事例報告 ①国内3大学＋米国連携大学合同プログラム - 李ウォンギョン 上智大学グローバル教育センター特任助教 - Dr. Sherri Lynch ゴンザガ大学 (Director of Community, Corporate and External Relations) ②看護学科科目 - 吉野八重 上智大学総合人間科学部看護学科准教授 - 根岸まゆみ 静岡県立大学看護学部看護学科講師 - Dr. Layla Garrigues ポートランド大学助教 (School of Nursing & Health Innovations) ③国際学生フォーラム - 森山新 お茶の水女子大学国際教育センター長 - Dr. Peipei Qiu ヴァッサー大学教授 (Chinese and Japanese on the L.B. Dale & A. Lichtenstein Chair) - Dr. Hiromi Tsuchiya Dollase 准教授 (Chinese and Japanese and Director of Asian Studies)
11:00-11:10	質疑応答
11:15-11:45	1-3：COIL 経験学生パネルディスカッション モデレーター：澤崎宏一 静岡県立大学国際交流センター長 発表学生および参加プログラム（○番号は1-2 事例報告に該当）： - 橘川由依 上智大学経済学部経営学科2年（①） - 前田空 上智大学総合人間科学部看護学科4年（②） - 山口祐奈 上智大学総合人間科学部看護学科4年（②） - 田上湖都 お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科理学専攻修士課程2年（③）
11:45-11:55	休憩
11:55-12:45	第2部：今後の展望 2-1：米国連携大学ビデオメッセージ - Dr. Gerardo Blanco ボストンカレッジ准教授 (Academic Director of the Center for International Higher Education) - Dr. Joseph Hoff ノースカロライナ州立大学シャーロット校 (Director of the Global Education and Engagement Office) - Mr. Nari Fujita カリフォルニア大学デービス校 (Director of New Academic Initiatives and Destination Davis) - Dr. Jeffrey S. Philpott シアトル大学 (Director of University Core Curriculum) - Ms. Kirsti Ruud シアトル大学 (Advisor in the Education Abroad) 2-2：副学長パネルディスカッション テーマ：「オンライン教育・3大学連携の展望と発展性」 モデレーター：出口真紀子 上智大学グローバル教育センター長 - 伊呂原隆 上智大学学務担当副学長 - 石井クンツ昌子 お茶の水女子大学理事・副学長 - 富沢壽勇 静岡県立大学副学長（国際交流担当）
12:45-13:00	総括：石井クンツ昌子 お茶の水女子大学理事・副学長 閉会挨拶：富沢壽勇 静岡県立大学副学長（国際交流担当）

総合司会：水谷裕佳 上智大学 グローバル教育センター教授

第1部：成果報告

1-1. 事業5年間の成果報告

平成30年度
大学の世界展開力強化事業

米国・COIL

人間の安全保障と多文化共生に係る
課題発見型国際協働オンライン学習
プログラムの開発



上智大学 学務担当副学長 伊呂原 隆

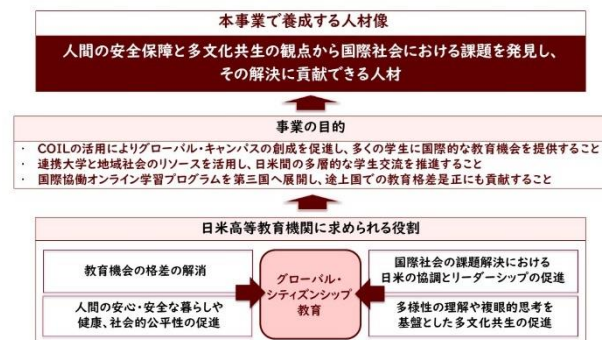
1. 事業概要

Overview of the Project



事業の全体像と養成する人材像

グローバル化戦略における本事業の位置付け



2. 学生交流と COIL科目の実績

Achievements of Students Exchange and COIL Courses



目次/Contents

1. 事業概要 Overview

2. 学生交流・COIL科目の実績 Achievements

3. 今後の展望 Prospects



COILとは

COIL (Collaborative Online International Learning) = オンライン国際協働教育

オンラインで国内外の大学と接続し、授業内外で交流をおこなう教育手法

● COILの学習効果

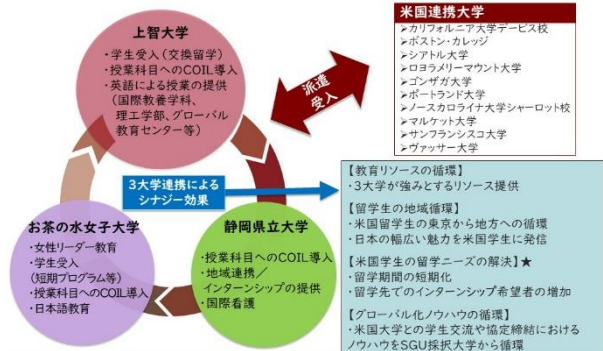
- 国内外の他大学の学生との協働学習や比較学習が容易に可能。
- 学生のリーダシップ能力、プロジェクトの企画、運営能力、ICTリテラシーの向上。
- 「科目」ごとの連携による教員間ネットワークの醸成（共同研究への可能性）。
- 様々な理由から留学が難しい学生への国際交流機会の提供。
- オンラインと対面を組み合わせた教育手法による有意義なグローバル教育の形。

● 連携の実施例

- Zoomなどのビデオ会議可能なアプリケーションを活用した同期接続。
- メッセンジャーやSNSを活用した非同期のディスカッション。
- 講義や学生発表の録画を交換し、同期または非同期でフィードバックやQ&Aを実施。

米国連携大学と国内3大学の連携体制

国内3大学それぞれの強みを活かした実施体制・学生交流



教育プログラムの内容

多層的な教育プログラム

①COILを活用したモビリティ・プログラム

目的
日米間の交流促進、学修効果の向上

内容
留学 + COIL留学準備・フォローアップ

COIL活用方法
留学前後の学生交流、コーディネーターによるプロモーション・質疑応答

②国内循環型の留学生受入

目的
日米間の交流促進、学修効果の向上

内容
上智（英語による授業）、お茶（日本語教育）、静岡県立（インターンシップ）での学修

COIL活用方法
留学前後の学生交流、コーディネーターによるプロモーション・質疑応答、企業との接続

③授業科目へのCOIL導入

目的
グローバル・キャンパスの創成

内容
「国際保健・災害看護論」、「国際共生社会論実習」、「グローバル化と国際貢献」等の授業内でCOIL活用

COIL活用方法
看護、理工、米国研究等、映像接続や現地学生との交流効果が高い科目で活用

④Jesuit Worldwide Learning (JWL) 連携プログラム

目的
国境を越えた教育格差の解消
オンライン教育を活用した教育交流の促進

内容
JWLプロジェクトサイトへの学生派遣

COIL活用方法
現地機関や大学による派遣前オンライン講義、現地学習センターを通じたコンテンツ発信

【テーマ】
人間の
安全保障・
多文化
共生

IV. 総括シンポジウム報告

2. 発表資料

学生交流の実績

- 学生に修得させる能力**
- 多様な価値観の尊重と、異文化に対する柔軟な考え方や社会貢献への高い意識
 - 自己と他者を理解し、グローバルな協調と調和を促進できる能力

①COILを活用したモビリティ・プログラム

留学 + COIL留学準備・フォローアップ

②国内循環型の留学生受入

日本語教育(お茶の水)、静岡スタディツアー

派遣

年度	2018	2019	2020	2021	2022	合計
目標	21	75	81	89	94	360
実績	26	104	40	80	35	285

受入

年度	2018	2019	2020	2021	2022	合計
目標	3	22	23	36	36	120
実績	5	47	0	7	20	79



COIL型教育手法を活用した授業科目

- 学生に修得させる能力**
- 多様な価値観の尊重と、異文化に対する柔軟な考え方や社会貢献への高い意識
 - 自己と他者を理解し、グローバルな協調と調和を促進できる能力

③授業科目へのCOIL導入

多彩な分野での導入、多層的な実施方法による発展→多様な学生の成長

科目数

年度	2018	2019	2020	2021	2022
目標	6	15	26	37	48
実績	10	25	28	41	25

受講者数

年度	2018	2019	2020	2021	2022
目標	250	700	1,145	1,590	2,035
実績	353	449	489	880	年度末に確認

学生の学習効果測定 COIL受講前後にグローバルコンピテンシーを指標とするアンケートを実施



大学の国際化、情報公開、成果の普及

成果の外部発信と持続可能な実施に向けた体制

- 日英両言語によるウェブサイト情報発信、報告書やガイドブックによる成果の発信と普及
- COILワークショップでの取組内容の報告やCOIL促進のための情報共有
- 教職員やTAのCOIL活用能力の修得と強化を通じた、継続性のある運営体制の構築

COIL担当教員の拡充
および
広報・情報発信
COIL導入ガイドの作成

3大学合同
ワーキンググループ
(FD/SD)

COILの新規導入を検討する教員向け
概要紹介にとどまらないCOIL実施における
実践的な情報を網羅したガイドブック・動画

Characteristics!
動画
Communication Platforms

ガイドブック
COIL導入ガイド

COIL型教育実践事例集

3. 今後の展望 Prospects



事業終了後の自走化と国内3大学連携

学びと教育の自由度の向上・多様な国際学習機会の提供

COILによる高い学習効果の普及へ:全学的な実践と多様な発展

- 各学部学科の教員の強みやネットワークを生かした取り組みへの注力
- 新規導入教員の開拓と研修、教育による促進
- 米国連携大学以外のパートナー開拓と連携強化
- 海外大学に限らない国内COILの実施

上智大学 × お茶の水女子大学 × 静岡県立大学

国内3大学の継続的な連携強化によるシナジー

- 国公立大学それぞれ強みを生かした取り組みの共有と波及効果の生成
- 事業内で築いた教職員ネットワークによる協働
- 3大学合同のゴンザガ大学オンラインプログラムの継続実施とさらなる発展

ご清聴ありがとうございました

Thank you.



IV. 総括シンポジウム報告

2. 発表資料

第1部：成果報告

1-2. 事例報告

① 国内3大学+米国連携大学合同プログラム

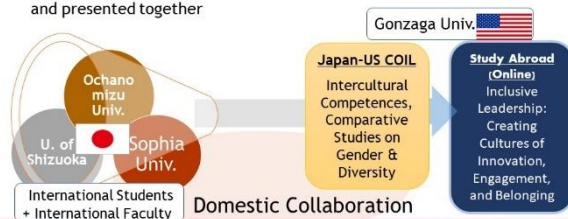
上智大学
SOPHIA UNIVERSITY
教習が世界をつなぐ

**Collaborative Program with
three Japanese universities
+ Gonzaga University in the US**

**Center for Global Education and Discovery,
Sophia University
Dr. Wonkyung Rhee**

Multi-layered and Multi-method COIL Design: over the US-Asia

- Purpose: Acquire a more global perspective, exchange knowledge and idea in academic disciplines
- Method: Synchronous and asynchronous collaborations among 4 institutes in Japan and the US
- Students from different institutions made small groups based on their interests involving gender and diversity issues and discussed, researched, and presented together



COIL in 2020

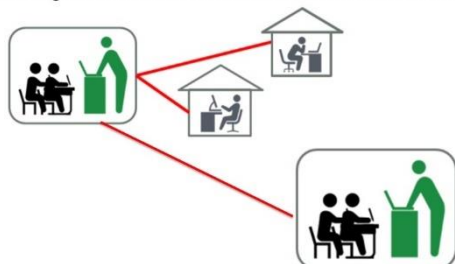
Connecting students from all around the world



Source: Online Class Portal @ the University of Tokyo
https://utelecon.github.io/faculty_members

COIL in 2021 and 2022

Connecting classrooms as well as students in remote areas



Source: Online Class Portal @ the University of Tokyo
https://utelecon.github.io/faculty_members

COIL with Partners

Domestic Partners
Ochanomizu University
University of Shizuoka



10 US Partners for MEXT Project

Boston College	Gonzaga University
Seattle University	Marquette University
Loyola Marymount University	University of San Francisco
The University of North Carolina at Charlotte	University of California, Davis Continuing and Professional Education
University of Portland	Vassar College

Elective course

#Understanding Asia

- Held in fall semester, deals with topics involving gender equality and diversity issues in Japan, Asia, and the US
- Domestic COIL: Synchronous sessions via Zoom, Group works
- COIL with Gonzaga: Recorded video exchange, Zoom MG

Institution	Sophia University (Ochanomizu/Shizuoka)	Gonzaga University
Course title	Understanding Contemporary Asian Society	Leading Across Cultures
Instructors	Dr. Wonkyung Rhee	Dr. Nick Franco
Number of students	46	36
Class schedule	Tuesday, 3rd period Thursday, Lunch time	Wednesday, evening
Languages	English/Japanese, Chinese	English/Japanese, Chinese
Activities	Lecture-Breakout rooms-Debriefing in Main Room	

COIL with Gonzaga University in the US



COIL and HyFlex Class



IV. 総括シンポジウム報告

2. 発表資料

Spring Break intensive program #Inclusive Leadership

- Held in February-March at School of Leadership, Gonzaga University
- Covered various topics of diversity and gender in US as well as inclusive leadership based on the diversity
- Utilized advantages of online study abroad program: Combined synchronous sessions via Zoom, Group works, Text-based exchanges using Padlet, Japanese debriefing sessions

Message from Gonzaga University

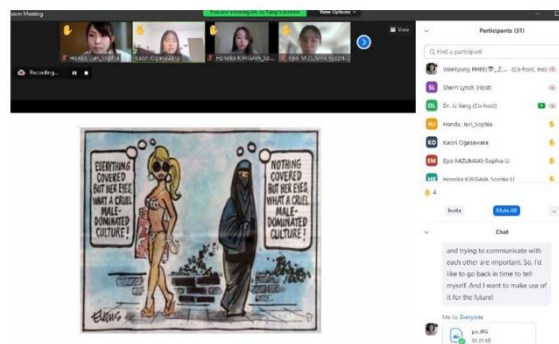


Sherri Lynch

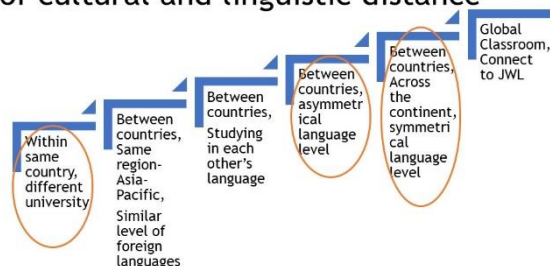
Concluding Remarks

- Self-motivation and personal development from the Interactive Learning
- Promoting Digital Literacy
"79% of knowledge workers report working always or frequently in virtual teams."
-Ferrazzi-Greenlight study, 2014
- COIL for Global Citizenship Education

COIL Discussion



COIL: Local to Global Different stages of COIL in terms of cultural and linguistic distance



THANK YOU FOR LISTENING!

Sophia Bringing the World Together

叡智が世界をつなぐ



② 看護学科科目

Collaborative Online International Learning for Global Health Nursing Education



Yae Yoshino, PhD, MPH, DPHTM, RN & Mayumi Negishi, PhD, MPH, RN



December 15, 2022



Outline

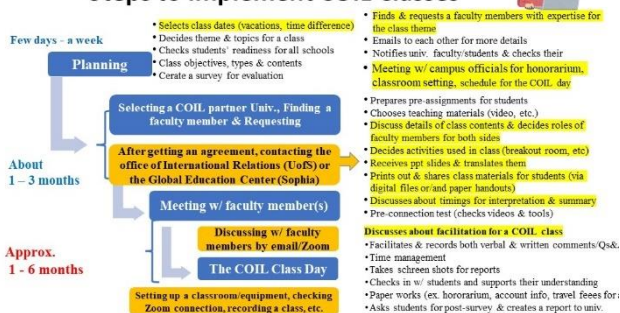
- Steps to implement COIL classes
- Types & Examples of COIL classes
- Purposes of COIL in Nursing Education
- Total #s of COIL classes implemented
- Students' feedback & outcomes
- Achievements by faculty members
- Areas in need of improvement
- Challenges for the future



IV. 総括シンポジウム報告

2. 発表資料

Steps to Implement COIL Classes

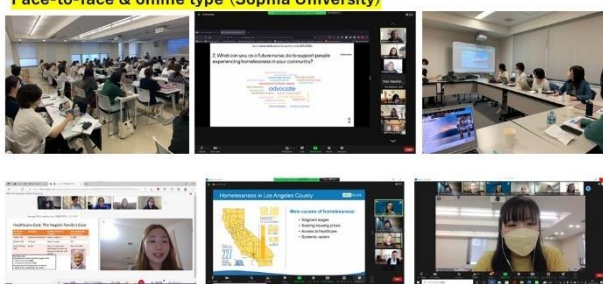


Type of COIL classes

- 1. Virtual Class Visiting/ Observation and Discussion:**
(English lectures and discussions by partner university faculty/Japanese faculty)
- 2. English presentation by a group of Japanese students**
(Presentation and discussion by Japanese students to American students)
- 3. Presentations on the same topics by all students from different countries:**
(Presentation and discussion on mixed university students from different countries)
- 4. Interactive case study and discussion**
(Mainly breakout sessions with mixed groups of students from each country)

* Depending on levels of students' English communication skills, provide full or summarized interpretations of lecture(s) and assess students' levels of understanding besides facilitating during a class.

Face-to-face & online type (Sophia University)



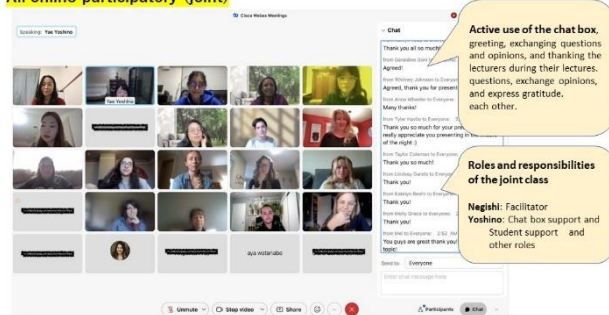
Large classrooms: face-to-face (University of Shizuoka)



Small group seminar type



All online participatory (joint)



4 universities in 3 countries (Joint)



Case Study: COIL classes through collaboration of 5 universities in 4 countries

【Participating countries & universities & number of students】

Japan: Sophia University (5),
University of Shizuoka (3)
U.S.A.: University of Portland (4)
Mongolia: National Medical University (Dorno-govi) (10)
Thailand: Khon Kaen National University (13)



【Topic】 Health promotion practices among nursing students

【Class Structure】

Preparation and sharing of videos and materials on the campus environment of each university and introduction of participating students

On the day of COIL: Presentations by students from each country on health knowledge and behaviors

⇒ Mapping via "Slack"

⇒ Question and answer session, discussion

- Health promotion practices among nursing students

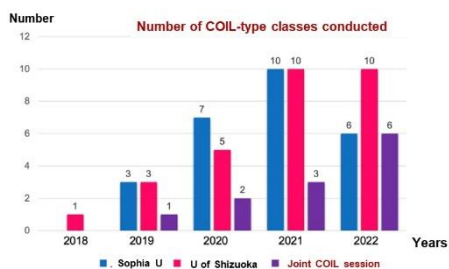
Objectives of COIL in Nursing Education

- To provide an opportunity for students who have difficulty in studying abroad or long-term training programs due to the overcrowded curriculum unique to nursing education (classes, exercises, and practical training), financial reasons, and lack of preparation for language study, to learn and acquire the ability to adapt to different cultures, the knowledge necessary for multicultural conviviality, and cultural humility.
- Motivate and improve language learning (speaking and listening skills) through co-curricular experiences with overseas nursing students.
- To acquire presentation, leadership, management and application skills necessary for field activities in Japan and abroad, as well as the ability to discover and utilize existing resources.
- Acquire new perspectives by gathering evidence-based information on healthcare issues in their own countries and relearning objectively in order to present to overseas nursing students the healthcare system and nursing problems and issues in Japan and how to solve them.
- Gain a sense of self-efficacy, self-affirmation, and self-confidence by having their presentations understood and accepted by students from other countries.
- To reflect on the universality of the role and mission of nursing across cultures and borders.

IV. 総括シンポジウム報告

2. 発表資料

Number of COIL programs implemented and outcomes (as of 2019-2022)



Certificate Award for Students



Reactions of participating students

- I thought that the U.S. had the world's highest level of healthcare excellence, but was surprised by the large economic and health disparities in the country and the racial discrimination in access to healthcare
- I realized the meaning and importance of listening to the voices of people in developing countries and learning about the local living environment, culture, and values that underlie health issues.
- I was able to share my concerns and difficulties with my peers who share the same sense of mission and goals as nursing students, even though we are from different countries, and this gave me courage.
- I want to learn more English so that I can communicate with people from all over the world and grow together with them.
- By participating in the COIL class, I was able to deepen my study of medicine and nursing in my own country while gaining a more objective and multifaceted perspective.
- I am happy to make friends with overseas nursing students and stay connected with them on SNS.

Students' Outcome

Presentation of graduation thesis at an international nursing conferences

No.	卒業年度	発表年・月	学会開催国	学会名
1	2018	2019年11月	USA	Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing 45th Biennial Convention
2	2019	2021年11月	UAE	International Council of Nurses 2021 Congress
3	2020	2021年11月	USA	Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing 46th Biennial Convention
4	2020	2021年11月	USA	Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing 46th Biennial Convention
5	2021	2022年8月	Scotland	Sigma's 33rd International Nursing Research Congress
6	2021	2022年10月	Taiwan	The 7th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science
7	2021	2023年7月	Canada	International Council of Nurses 2021 Congress

Procedure flow up to presentation at the conference
 Before acceptance: English translation of abstract by students → Editing by faculty → Confirmation with students → Abstract submission to the conference website
 After acceptance: Students create posters in English with guidance from faculty members → Register for the conference and submit posters → Guidance on presentation methods
 On the day of and after the conference: Support for student presentations and learning from other abstracts → Debriefing at a later date

Results related to the COIL program (Achievements)

Mayumi Negishi, RN, MNS, PhD

- Negishi, Mayumi; Case study of nursing education by COIL: Online international collaborative classes among universities in multiple countries, (online oral presentation), 2022 ILCAA Educational Innovation Conference, 2022.9, held online
- Junko Watanabe, Mayumi Negishi; Online international cooperative online classes among universities in multiple countries: Case study of University of Shizuoka (1) Basic nursing education using COIL (Watanabe), (2) Practical examples of COIL classes (Negishi), Japan Association of Nursing Programs: Seminar planned and organized by JANPU International Exchange Promotion Committee (online oral presentation), 2022.2 (in Japanese), Held online
- COIL type class connecting nursing of different cultures" Mayumi Negishi, Junko Watanabe; Nursing Education, Igaku Shoin, Vol.61, No.5, pp.408-415, 2020.5.

Yae Yoshino, RMW, DPHTM, MPH, PhD

- Salem, B., Yoshino, Y., et al; Developing Virtual Learning Opportunities to Educate Prelicensure Nursing Students About Health Disparities Impacting People Experiencing Homelessness in the United States and Abroad (Online Presentation), Annual Congress of Association for teaching prevention teaching and research (APTTR), 2022.3, USA
- Yae Yoshino, Ryutarō Kase, Takeo Yamamura, Aya Watanabe; Collaborative Online International Learning (COIL) for nursing students' learning and approaches to global health (face-to-face oral presentation), 26th Japan Society of Travel Medicine, 2022.9, Oita

Waiting for Acceptance, Joint Presentation at ICN, 2023
 Tadese, R., Negishi, M., Lanciotti, K., Yoshino, Y., & Hempstock, W.; Collaborative Online International Learning for global health nursing education between the US and Japan, International Council of Nurses (ICN), ICN Congress 2023, 2023.7, Canada

Matters requiring improvement

- Dealing with differences in students' language abilities (interpreters required or not)
- Time difference when setting ZOOM meeting and online lecture times for class planning
 Example: U.S. West Coast: 2:00 p.m. = Japan: 6-7:00 p.m. (winter and summer time)
- Consistency of COIL's educational goals, and objectives in the university curriculum in both Japan and the U.S. Differences in educational methods (lecture-based vs. discussion-based)
- Academic agreements for credit recognition
- Selection of universal topics (those that allow students to learn cross-cultural understanding and cultural humility)
- COIL-specific class evaluation (development of evaluation indicators, meaning making)
- Provision of ongoing opportunities of communication between students (creation of a platform)
- Building active participation, and cooperation among faculties on campus
- Positioning of COIL within faculties and departments (planning and management)

Planned Activities

- Apply for and obtain grants to continue COIL classes (2022-2024)
- Verification and objective evaluation of various types of COIL class methods implemented in the pilot. (The number of times the classes will be conducted will be reduced in order to further refine the content).
- Presentation of COIL class results
- Joint presentation at international conferences
- Joint writing and submission of papers to international journals
- Launching International joint research on COIL (acquisition of research funds, research plan)

Thank you!



IV. 総括シンポジウム報告

2. 発表資料

③ 国際学生フォーラム




From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship

(Byram, 2008)





Collaborative course with Vassar College, "Language Education in Globalizing World I"

- Held as an annual "International Student Forum"
- International Student Forum was initiated after the Great East Japan Earthquake occurred in 2011
- Students discussed what they can do as a younger generation in the case of global accidents occurring anywhere on this planet
- 2020, 9th Forum, "Environmentalism"
- 2021, 10th Forum, "COVID-19"
- 2022, 11th Forum, "Reconsideration of Peace Education"
- 2023, 12th Forum, "Diversity and Inclusion"




2022

Aims of the International Student Forum


- Plurilingual & Pluricultural Education:** By participating in presentations and discussions using each other's languages, students are provided an opportunity to overcome differences in language, culture, values, etc., and realize dialogue for problem solving and peace.
- Leadership & Collaboration:** Students gain the experiences and skills necessary to build an international event with the hand of students from different countries
- Intercultural Citizenship Education:** They Develop capacity for a democratic culture and addressing the problems of today's society as global citizens





Prior Learning & Forum


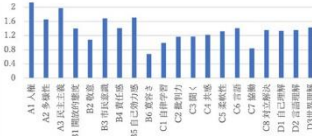
- October:** Orientation was held, and **Previous learning** starts
- November-February:** **Online lectures** by Japanese and American faculty members
- November-February:** Each group decides on a theme and interacts and prepares for the presentation, **using SNS**
 - (1) Improving language skills and understanding different cultures
 - (2) Improving presentation skills in foreign languages
 - (3) Building a relationship of trust that allows them to discuss sensitive issues
 - (4) Developing autonomous learning skills and self-reliance
- February:** **International Student Forum** was held
- Face-to-face:** Vassar University (February 15-25, 2020)
- Online:** 2021, 2022, 2023



2021

Outcomes

- By using ZOOM**, we explore the possibility of holding lectures and joint classes **on a daily basis** (not as an alternative to face-to-face communication).
- Using each other's languages, students engaged in presentations and international and interdisciplinary discussions on various world issues.
- They took various problems of the world as their own problems.
- The forum contributed to citizenship education in higher education.

Participants' Sentiments

- Interacting with buddies **online** led to better forum presentations and deeper interaction.
- The half-year online exchange** enhanced the "capacity for democratic culture".
- I cherish this encounter and want to continue to interact with them in the future.
- By presenting and interacting in a multilingual and multicultural environment, I improved my plurilingual and pluricultural skills, and broadened my horizons and identity.
- Studying abroad (America) is different from studying in Japan. I want to connect this experience to studying abroad and deepening my learning.
- Even with the same environmental and peace issues, the ways of understanding and responding to them are completely different from each other, depending on the country and academic field.
- The student-led approach fostered citizenship and leadership.

References

- 森山新 (2021)「間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析: 民主的文化のための能力の参照枠 (RFCD) の観点から」『人文科学研究』, 17, 25-38 (論文) [pdf] The 8th Forum
- 森山新 (2022)「間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析: 政治教育的側面、及び複言語・複文化教育的側面からの考察」『人文科学研究』, 18, 55-68 (論文) [pdf] The 9th Forum
- 森山新, シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析: コスモポリタン・シティズンシップの観点を中心に, シティズンシップ教育研究大会2020, 2020/10/4, オンライン (口頭発表) The 9th Forum
- 森山新 (2023)「間文化的シティズンシップ教育としての第11回国際学生フォーラム: 民主的文化のための能力の参照枠を尺度として」(近日常) (論文) The 11th Forum
- Forum報告書 <https://www.li.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/2.html>

IV. 総括シンポジウム報告

3. 第1部「COIL 経験学生パネルディスカッション」登壇学生の声

ゴンザガ大学合同オンラインプログラムの体験

上智大学 経済部経営学科
橘川 由依

私はオンライン COIL プログラム、「多文化共生社会のリーダーシップ」を受講した。このプログラムでは、アメリカのワシントン州にあるゴンザガ大学の教授や生徒と共に、少人数で多様性、また多様性を実現するために組織のリーダーが求められることについて学び、意見交換をした。COIL はそれまでに授業で経験していたので特徴は理解していた。

本プログラムへの参加動機は大きく分けて二つあった。一つは COIL が留学のような経験を低コストで得られるから、という点にある。日本で気軽にオンライン受講できるため、留学に比べて経済的、時間的、体力コストを抑えることができる、という点が大きな魅力だった。二点目に、現地の英語と自分の英語能力にどれだけギャップがあるのかを確かめたかった。日本にいただけでは自分の英語能力がどこまで通じるのかわからないので、実際に現地の大学の講義に参加したいと思った。

実際に COIL に参加する前と参加した後で、「多様性」という言葉やそれに関する社会問題の認識が変わった。COIL を受ける前、多様性とは多くの日本人が考えるように、様々な国籍の人が同じ組織に入り共存する、という意味だと思っていた。しかし COIL 受講後、人には人種だけでなく性別や家庭環境まで多くの特徴が存在するということに気付いた。また自分が持っている数多くの特徴をどう理解し、どの部分が大事なのか、つまり自分のアイデンティティの受け止め方というのは人それぞれである、という考えが多様性を指していると理解した。たくさんの国籍の人が集まらなくても、どんな人でも二人以上いる時点で多様性は実現されている、ということを理解した。

この COIL に参加したことで、自分のアイデンティティとどう向き合うかについてでも考え方が変わった。今まで自分の特徴である女性、アジア人という要素は社会において不利に働くことが多いと考えていた。よって同じ特徴を持った人たちは反旗を翻し、声をあげていくことが必要なのではないかと考えていたし、実際にそういう社会運動をよく目にしていた。しかし本プログラムを通して、そのアイデンティティは虐げられるものではなく、良い意味でも悪い意味でも普通の特徴である、と気づくことができた。COIL を通し、アジア人であること、また女性であることを悪いように意識せずに済むようになった。

英語で講義の内容を理解し、全員で議論することは体力を使ったが、それ以上に多くのものを得ることができた。オンラインだったため、トピックを理解し自分や他人の考えを理解し深めることに集中することができたと思う。



総括シンポジウム 学生パネルディスカッションの様子

(2022 年 12 月 15 日)

IV. 総括シンポジウム報告

3. 第1部「COIL 経験学生パネルディスカッション」登壇学生の声

COIL 参加による看護学生二名の学び

上智大学 総合人間科学部看護学科
前田 空、山口 祐奈

上智大学総合人間科学部看護学科では、3年次の学科必修科目にて講義形式のCOIL、4年次からは有志者のみでプレゼンテーションを行う形でのCOILなどがあり、私たちは、将来国際的な場で医療に携わりたいという希望があることから複数回に渡り参加した。二人とも留学経験が無い中での参加であったが、多くの成長や学びを得ることができた。

私たちがCOILを行う中で最も大きな課題として感じていたのは、語学力や海外経験の少なさである。国際的な学びに大きな関心はあっても語学力に大きな壁を感じており、また、海外経験が少ないことから、漠然とハードルの高さを感じているという状況であった。特に、講義形式やプレゼンテーションを行うCOILよりも、海外の学生とディスカッションをするという形式のCOILについては、事前準備が全く出来ないというわけではないものの、相手の意見も理解し尊重しつつ自分の意見を英語で述べなくてはならなかったため、不安が大きかったと言える。しかし、実際に挑戦してみると、入念な事前学習や教員のサポートがある中で他の学生と協力しながら進めることが出来たため、楽しみながらCOILに参加することが出来た。また、実際に参加してみることで、漠然としていた不安を明確な課題として認識することができるようになり、自身が今後やるべき事の指針を定めることが出来るようになった。さらに、複数回参加したことによって、回数を重ねるごとに課題をクリアしていき成長につなげることが出来たと感じている。

また、海外で同じ分野である看護学や医療分野に携わる人々と交流することで新しい学びを得るだけでなく、これまで大学で学んできたことに対して新たな視点を加えて、より深く再学習することができた。現在学んでいることが全ての国で普遍的に共通しているものではなく、想像の更に外側の世界があることを認識することで、看護に必要な「他者の尊重」や「他者の理解すること」の実践に一步近づけたように感じる。

そして、複数に渡ってCOILを経験することが出来たことにより、COIL参加前よりも自分自身に自信を持てたように感じる。二人とも不安がある中でのCOIL参加であったが、最後までやりきることが出来たからではないかと考える。また、語学力等の不安で尻込みせず、挑戦してみることが重要であるということも学ぶことが出来た。



総括シンポジウム 第1部 登壇教員・学生一同

IV. 総括シンポジウム報告

3. 第1部「COIL 経験学生パネルディスカッション」登壇学生の声

第9回国際学生フォーラムに参加して

お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科理学専攻
田上 湖都

私はお茶の水女子大学にて2019年秋学期に開講された「グローバル化と言語教育」という授業を履修し、その後2020年2月にアメリカ・ヴァッサー大学で開催された第9回国際学生フォーラム（テーマ：環境問題）に参加しました。このフォーラムは前述した授業の一環であったため、それまでの半年間の授業の主な目的は、ヴァッサー大学の学生とのオンラインでの交流によってフォーラムでの発表の完成度を高めることでした。私は大学で化学を専攻しており、当時は大学3年生で研究室に所属する前の最後の年でした。この報告書では、理系の学生である私がなぜ国際学生フォーラムに参加しようと思ったのか、そしてオンラインの利用がいかに国際交流を円滑にできたかについてまとめようと思います。

まずは動機についてです。私が国際学生フォーラムに参加しようと思ったきっかけは3つありました。まず1つ目は、このフォーラムがオンラインでの交流と実際の渡航を組み合わせたプログラムであった点です。事前に現地の学生と交流を行うことで、アメリカ滞在時により有意義に時間を過ごすことができると考えました。2つ目の理由は、研究室配属前に英語でのプレゼンテーションの経験を積みたかったこと、そして3つ目は、テーマである環境問題に、自身が学んでいる化学の視点から向き合えないかと考えたためです。

履修した「グローバル化と言語教育」ではまず自分の発表のテーマを決め、それを15分間で発表するための準備を進めました。私はプラスチックがもたらす環境汚染について、消費者目線と化学的な視点の双方から問題提起と解決策について発表することとしました。テーマが決まると、類似のテーマを有するヴァッサー大学の学生とペアになり、SNSやZoomなどを通じて綿密にやり取りを行いました。ヴァッサー大学の学生は日本語を専攻しており、彼らは日本語で発表しなければならないという決まりがあったため、お互いがお互いの言語をカバーしあいながら、発表の完成度を高めていきました。今振り返ると、コロナウイルス流行以前である2019年に行われたZoomやSkypeなどを駆使した授業展開は、時代を先駆けていたと感じます。渡航中は、ヴァッサー大学の学生とようやく対面を果たしましたが、オンラインでの交流のおかげで全く初対面の感覚がなく、期待通りにアメリカ滞在は彼らの案内のもと大変有意義な時間を過ごすことができました。

次に、オンラインでの交流を振り返り、良かった点や苦労した点、自身の変化について振り返ります。まず良かった点として、語学能力の向上はもちろんのこと、アメリカの学生と接することで自分の意見を言うことの重要性に気づかされ、より主体的な性格になったと感じます。時には時差の問題から話し合いがなかなか進まないことはありましたが、そういった場合にはオンデマンドのチャット機能を用いるなどして臨機応変に議論を進めることができました。また、この交流を通じて、たとえ現地に行かなくとも、オンライン上で十分なディスカッションを行えるということがわかり、続くコロナ下でもこの時の経験を活かすことができました。

以上まとめると、オンライン交流と実渡航を伴う国際学生フォーラムに参加したことによって内面的にも成長することができ、目的の英語プレゼンテーションの経験を積むこともできました。今後もこの経験を活かし、国際的な研究者になれるよう精進します。

Ⅳ. 総括シンポジウム報告

4. 第2部「3大学副学長パネルディスカッション」まとめ

上智大学 グローバル教育センター長

出口 真紀子

シンポジウムの第二部では、「オンライン教育・3大学連携の展望と発展性」というテーマで、同事業の連携3大学の副学長によるパネルディスカッションが行われた。本事業で培った連携の成果と今後の展望や、COILをはじめとするオンライン教育の現状と今後の可能性について各副学長が語った。

本事業の成果について、上智大学の伊呂原隆学務担当副学長は、COILを活用したモビリティプログラムで渡航前にオンラインで学生をつなぐことが留学へのモチベーション向上に繋がった効果や、国内循環型の留学生の受け入れにおいて各大学の強み（お茶の水女子大学では日本語教育、静岡県立大学では地方自治体、産業界とのつながり）を生かすことができたことや、日本の大学同士で連携することの相乗効果の大きさを訴えた。お茶の水女子大学の石井クンツ理事・昌子副学長（研究・国際交流・男女共同参画担当）は、協定校であるヴァッサー大学との合同授業を積極的に推進し、関係性を強化できたことや、国内3大学との連携によるゴンザガ大学との合同授業が、教員・学生ともに高い評価を得たと報告した。静岡県立大学の富沢壽勇副学長（国際交流担当）は、教員、職員、学生の各レベルで効果と波及があったとし、国際看護の領域でのCOILは、米国のみならずタイやモンゴルの医科大学へと連携先が拡大した成果を報告した。また、各3大学の事務局が重ねてきた数々の会議が、豊かな国際交流のネットワークへと発展したと語った。

COILをはじめとするオンライン教育の現状と今後の可能性については、伊呂原副学長は、自大学だけでは研究教育の面で限界がある故、他大学とのコラボレーションが必須であり、COIL型のオンライン教育がグローバルスタンダードになる可能性を示唆した。石井理事・副学長は、実際に海外渡航が可能になったとしてもオンラインの短期研修や、協定校とのオンライン交流会を継続するとし、新たに採択された世界展開力事業でも海外の連携大学とのCOILを実施する予定だと語った。富沢副学長は、COILのテーマである「人間の安全保障と多文化共生」を基盤に、国内外の教育格差を是正するツールとしての側面の重要性を説き、オンライン教育においても多面的な理解や複眼的な思考力を養成する上で、アクティブラーニングとしての可能性にも触れた。

最後に各学長よりCOILに関心のある大学へのメッセージを頂戴した。伊呂原副学長は「まずはやってみる」が重要と述べ、「1回からでも大丈夫」と一歩を踏み出すことを推奨した。石井理事・副学長は、ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョンが重要課題となっている現在、COILこそがDEIを直接学べる形態だと語った。富沢副学長は、パートナー選びは最初から堅く考えずに、気軽に柔軟に始められたらいいと述べた。

私立、国立、公立と設置形態の違う3大学が連携し、培ってきたCOILの知識・ノウハウは、日本のほとんどの大学にも適用できる普遍性を持っており、今後も多くの大学へと共有していきたいという富沢副学長の言葉で締めくくられた有意義なディスカッションとなった。

IV. 総括シンポジウム報告

5. シンポジウム総括

COIL 総括シンポジウムを終えて

静岡県立大学 副学長（国際交流担当）

富沢 壽勇

総括シンポジウムでは多彩な COIL 実施諸例の成果報告、並びにその総括と展望に関する意見・情報交換を通じ、COIL 事業の新たな可能性や課題が明らかになりました。本事業開始の 2018 年キックオフ シンポジウム基調講演で、鬼頭静岡県立大学前学長は設置母体や建学の精神がそれぞれ異なる教育機関が協働してプログラムを遂行することの意義を 2 点指摘していました。一つは、地域の枠組みを超えた遠隔地間の連携事業は、新しい大学間協力の方法として意義を持つこと、もう一つは、異なった設立理念を持つ大学が共通の目標に向かってどのような形での連携が可能か提案をすることが期待できるという趣旨で、それが未来を創る先導的モデルとなり得ることも示唆されました。今回の総括シンポジウムを通じて、そのような先導的モデルを構築する素材はかなり集まったことが認識されました。とりわけ、COIL やオンライン授業を大学の教育体系の中に効果的に組み込んだモデルの構築は、3 大学を中心とした連携をさらに深化、拡大させながら、追究して行く価値があります。また、COIL は国内に居ながら海外留学に似た体験が得られるメリットがありますが、将来的には上智大学の曄道学長が提案されたように海外留学中の学生が在籍大学の単位を COIL で履修するといった逆の発想もあり得ますので、その可能性はさらに膨らみます。

地域枠組みを超えた連携モデルとして刺激となった一例は、米国大学提供のオンラインプログラム“Inclusive Leadership Program”を基盤にした地域間連携の試みです。このジェンダーも含めあらゆる人間の多様性を包摂する新たなリーダーシップの養成プログラムで育った人材が、たとえばお茶の水女子大学のジェンダード・イノベーション研究所で更に切磋琢磨し、女性に対応できる生產品開発のイノベーションを起こす人材として成長し、そのような革新的人材が静岡でも起業して、県外に流出傾向にある女性を中心とした人口の動きをとどめるのみならず、活気ある地域再生に向かって積極的に貢献して行く、といった構図を想像するのも一興です。いずれにせよ、これからの大学はそれぞれの持ち味となる独自の価値と存在意義を維持しつつも、他大学との連携を多角的、戦略的に組み込みながら発展して行くことが肝要になると思います。3 大学はこれまで重ねてきた連携のネットワークをさらに積極的に活用しながら、大学教育の先導的モデルを協働で構築して行ければ幸いです。



総括シンポジウム

副学長パネルディスカッション登壇者

V. 事業総括

お茶の水女子大学 理事・副学長
石井クンツ 昌子

この5年間を振り返ると、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、社会全体が非常に大きな変化を経験した時期だったと感じています。そのなかで COIL のようなオンライン協働学習が、年を追うごとに定着し、5年前では考えられなかったような多様な学びが実現しています。そして、渡航を伴う留学や海外研修が再開しつつある今日においても、自国にしながら、オンライン上で海外の教員や学生とつながり、協働で学習する機会を得られる COIL は、これからグローバルな世界で活躍を期待される学生らにとって大変有意義であると確信しております。

また、日本学生支援機構のデータによると、コロナの影響による留学生数の減少率を比較すると欧州・北米・大洋州の落込みが著しく、北米出身の留学生に至っては、2021年の実績値が2019年よりも58.3%減少しております。このことから、本事業で得られた米国10大学とのネットワークは、今後の交流の回復に向けた重要な足がかりになると感じております。

この5年間で、延べ人数でいうと2000名を超える学生が、米国10大学とのCOILを経験しました。さらに、米国10大学以外も含めると、その数は数倍になると思われます。その学生の中には、COILを経験したことで海外に興味を持った学生もいるでしょうし、長期留学に行く決心がついた学生もいると思います。総括シンポジウムにおいて、本学の学生を代表して参加した田上さんも、COILをはじめとして多くの経験を積み重ね、昨年度は本学を代表して、JSTの主催する大規模イベントにおいて、英語での大学紹介で行いました。そして、今後は長期の海外留学に羽ばたこうとしています。このように、COILが学生のステップアップのよいきっかけになった事例は各大学でたくさんあることと思います。

また、私自身も昨年韓国の同徳女子大学とCOILを行いました。学生たちが大学の枠を飛び越えてオンライン上で活発に意見交換をする様子は非常に頼もしく、学生が他者からよい刺激を受けていることが画面を通してありありと感じられる、素晴らしい機会になりました。そして、相手大学の関係者と共同でCOILを実施したことで、COILは学生へのメリットのみならず、教員や大学全体にとっても、国内外の大学との関係を深める有用な手段だと実感いたしました。

我々3大学は、事業期間終了後も、様々な形で連携を続けていきたいと考えています。オンライン学習は、今後も時代の変化にあわせて発展してくものだと思いますが、この5年間のCOIL事業で培った経験や大学間の連携は非常に有益な財産として我々の中に残っており、今後の多様な教育の展開に向けて様々な場面で生きてくるものと確信しております。

重ねまして、これまで事業をともに進めてきた上智大学、静岡県立大学の皆様、そしてご関係の皆様への感謝の念をお伝えして、私からの総括とさせていただきます。

I. Introduction

Takashi Irohara
Vice President for Academic Affairs
Professor, Faculty of Science and Technology
Sophia University

“Development of COIL Programs for Human Security and Multicultural Coexistence,” which forms part of “2018 Inter-University Exchange Project: Support for the Formation of Collaborative Programs with U.S. Universities using COIL-style Education,” is a project for which Sophia University, Ochanomizu University, and the University of Shizuoka jointly applied and were accepted. This five-year project will come to a conclusion at the end of this fiscal year.

The significance of introducing COIL-style education lies in the collaborative, multifaceted learning opportunities it offers to both domestic and overseas students who for various reasons have had difficulties collaborating in conventional educational formats. In this project, we have utilized the characteristics of COIL-style education not only to facilitate student interactions between Japan and the U.S. but also to roll out multi-layered international higher education and increase student mobility, attempting to spread such education to a third country.

Japan and the U.S. are expected to cooperate with each other and exercise leadership in addressing issues of the international community, such as the SDGs. With this, the importance of global citizenship education, in which Japanese and U.S. universities collaborate to nurture cross-cultural understanding, negotiation skills, and communication skills and lay the foundation for thinking about multicultural coexistence, is increasing. Our Japan-U.S. COIL-style education project has focused on two central themes: “human security,” which is about people’s health as well as safe and secure lives, and “multicultural coexistence,” which is founded on understanding diversity as well as thinking from multiple perspectives. We have rolled out this project with the aim of developing human resources that can contribute to finding solutions to challenges the two themes face.

One of the strengths of this project is the robust lineup of U.S. and Japanese partner universities. Ten U.S. partner universities were chosen mainly from universities that have long histories of student exchange with Sophia University and Ochanomizu University and showed a strong interest in joint implementation of a COIL-style education program.

In Japan, the three domestic universities – Sophia University, Ochanomizu University, and the University of Shizuoka – collaborated while utilizing the strengths of each other. We have combined the characteristics of private, national, and prefectural universities and developed multi-campus programs. The collaboration between the three universities in academic disciplines has enabled us to work on the themes of “human security and multicultural coexistence” from diverse perspectives. Ochanomizu University shared their strengths and achievements in Japanese language education with Sophia University, and Sophia University and the University of Shizuoka did the same in nursing and international

relations. The collaborative learning programs in this project have thus been implemented in a multi-layered way.

The programs rolled out in this project revolve around the following four pillars.

The first pillar is “Mobility Program with COIL,” which added “preparation and follow-up” based on COIL to conventional exchange and short-term programs and in so doing greatly increased individual students’ pre-departure motivation toward studying abroad. Particularly memorable comment from some of the participating students were that when they met their counterparts for the first time upon arrival, it almost felt as if they had met their old friends without the need for ice-breaks.

The second pillar is “Domestic Circulation-style Program for Inbound Exchange Students” which was implemented under the collaboration between the three domestic universities. Inbound exchange students at Sophia University took a Japanese language course at Ochanomizu University with accredited credits. Also, the University of Shizuoka implemented the “Shizuoka Study Tour,” an on-site interactive program that provided opportunities for inbound exchange students studying at Sophia University to learn in a regional area in Japan with their peers. The tour utilized the University of Shizuoka’s networks with local governments and industries and offered valuable opportunities to experience diverse Japanese societies, cultures, and industry structures.

While the number of outbound and inbound exchange students of the above two programs exceeded the target before the COVID-19 pandemic, it fell below during the pandemic. Meanwhile, online exchange events were held even during the pandemic to maintain Japan-U.S. student interactions. I would like to extend my gratitude to those involved in this project, who, with an eye toward the restart of overseas travel, worked to keep creating opportunities for student interactions with our partner universities.

The third pillar is “Promotion of Implementation of COIL in Courses,” which as part of the creation of global campuses, aimed to offer the learning opportunities and international environment for students in Japan and the U.S. who did not have easy access to study abroad opportunities. The COIL implementation developed in multi-layers, taking various shapes and forms over the years – spreading across diverse academic fields and introducing wide variety of methods.

In the implementation, we gave priority to university-wide general education courses, which can create university-wide ripple effects, and seminar courses, which are taught in a flexible manner. This enriched our experience of applying COIL and increased the momentum for COIL-driven globalization, and also facilitated the introduction of COIL in the Department of Nursing, which has a curriculum that tends to deter students from studying abroad, as well as in graduate courses.

The COVID-19 pandemic facilitated the shift to online classes, which in turn facilitated the implementation of COIL in classes. The increased online class experience of faculty members and students also promoted COIL, as they learned to use diverse online platforms that were not limited to synchronous connections. In addition, the implementation made progress in seminar courses and small-sized classes that focus on collaboration between students and on comparative learning with more specialized content.

In the meantime, collaboration with U.S. universities other than our project partners, as well as with universities in a diverse range of countries have also accelerated. The number of COIL courses, including those outside this project, more than doubled between FY2020 and 2021, marking a significant achievement. For the self-propelling COIL initiatives after the end of the project term, we intend to continue with future-oriented, systematic improvement and collaboration to allow smooth implementation of COIL for any faculty members and courses.

The fourth and last pillar is “Collaborative Program with JWL.” JWL (Jesuit Worldwide Learning) is an NPO established based on a refugee support project by the Society of Jesus, which founded Sophia University. We collaborated with JWL’s refugee support education program to offer education opportunities to students with limited access to higher education. Specifically, we conducted a study tour in FY2019, in collaboration with JWL sites in Myanmar, with the theme of education and international contribution. Through the training sessions at the JWL sites, universities, international organizations, etc., we discussed with the participating students how to contribute to education in Myanmar through the online education. It was an extremely valuable experience not only for the participating students, but for the university.

While FY2022 is the final year for the Inter-University Exchange Project initiatives, the three Japanese universities share the understanding that COIL “increases the level of flexibility in learning and education and offers a diverse range of international learning opportunities.” In hopes to generate ripple effects accelerating the internationalization within each university, the universities will further develop the respective strengths of national, prefectural, and private universities, as well as continue to share the initiatives and learn from one another. The faculty/staff network built through this project is a valuable asset. Continued collaboration between the three domestic universities will be essential in the future promotion and development of COIL-style education.

II. Project Overview, Report of Results, and Future Prospects

“COIL Programs for Human Security and Multicultural Coexistence”

Office of Global Education and Collaboration, Sophia University

1. Project Overview

[Purpose and Overview of Exchange Programs]

The purpose of this project is to facilitate collaboration between Japanese and U.S. universities, roll out multi-layered international higher education, including an attempt to spread education to a third country, and increase student mobility. Remote education and exchange programs, which take advantage of online education (COIL system), are placed at the center of the project. International higher education today takes various forms and introducing online education is significant in that it (1) offers education opportunities to learners who do not have easy access to study abroad opportunities due to financial reasons or their university curricula, (2) gives learners multifaceted understanding on issues and the ability to think from multiple perspectives by creating opportunities to collaborate with others with diverse cultural backgrounds, and (3) enables effective learning in such classes as guidance before study abroad by utilizing videos from counterpart institutions and interactive communication. The project rolls out online education as project-based learning programs that center around “human security,” which is about people’s health and safe/secure lives, and “multicultural coexistence,” which is founded on understanding diversity as well as thinking from multiple perspectives.

The project revolves around Sophia University, Ochanomizu University, and the University of Shizuoka in Japan as well as 10 universities in the U.S., many of which are the former’s partner institutions. The exchange programs of the three Japanese universities provide the foundation on which they jointly conduct a short-term outbound program and preparation for and follow-up on study abroad, including language education. COIL is implemented in project-based learning courses that take advantage of the characteristics of each university’s programs, and collaborative learning is rolled out with a focus on global health, gender, and sustainability. We also aim to apply COIL to Jesuit Worldwide Learning (JWL), a remote learning project to support refugees that has been implemented by the Society of Jesus, the founder of Sophia University. JWL helps 5,000 people in 25 countries including those at refugee camps. (See page 57.)

In developing the programs, the three Japanese universities jointly hold program management meetings and proceed as they review the progress and rollout of the programs whenever necessary. In addition, we organize an “Evaluation Committee for International Collaborative Education” every year to gain advice from outside experts, and roll out the project as we evaluate the programs and identify issues.

In implementing COIL in courses, technical guidance for faculty members and the role of TAs are important. The project therefore strives to train and develop human resources as part of FD activities, and consideration is given to program sustainability after the completion of the project. In the project, the national, prefectural, and private universities link urban and regional/rural areas. This style utilizes the features of COIL and is intended to present a model for future online education.

[Human Resources to Be Developed]

In the project, Japanese and U.S. students engage in collaborative learning through online education and actual exchange activities. They thus come to understand diverse realities based on multiple perspectives, gain cross-cultural understanding, negotiation skills and communication skills, and acquire the foundation for thinking about multicultural coexistence. Furthermore, the program content allows students to discuss global issues from both Japanese and U.S. standpoints, which nurtures students' ability to explore how to find and solve problems while remaining rooted in reality. Students also develop analytical skills that enable them to look into specific issues such as safe and secure lives, health, and social equity in the actual human society. In addition, the group-based nature of the programs cultivates cooperation and coordination skills. All the skills mentioned above constitute elements of global citizenship education, which is essential in achieving the SDGs and demonstrate that online education initiatives spread education opportunities and tap the potential of next generation education.

2. Report of Results

(1) Exchange Programs

The project needed to overcome the spread of COVID-19, which acted as a large barrier. Due to the difficulty of traveling, the number of students that took part in the exchange programs did not reach the target. Prompt introduction and implementation of online exchange programs, however, resulted in active and fruitful student exchanges.

(i) Number of Exchange Students

[Number of outbound exchange students]

		FY2018	FY2019			FY2020			FY2021			FY2022		
Target (total number of students by FY)		21	75			81			89			94		
Achievements		26	104			40			80			73		
			In-person travel	Online	Hybrid	In-person travel	Online	Hybrid	In-person travel	Online	Hybrid	In-person travel	Online	Hybrid
			104	0	0	0	40	0	14	66	0	30	43	0
[Breakdown by exchange style]														
Exchange of less than three months with credit		25	82	0	0	0	17	0	0	39	0	10	43	0
Adoption of COIL-style education	Yes	25	72	0	0	0	17	0	0	39	0	10	43	0
	No	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Exchange of three months and longer with credit		0	20	0	0	0	0	0	14	0	0	20	0	0
Adoption of COIL-style education	Yes	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	10	0	0
	No	0	20	0	0	0	0	0	9	0	0	10	0	0
Exchange of less than three months other than the above		1	2	0	0	0	23	0	0	27	0	0	0	0
Adoption of COIL-style education	Yes	1	2	0	0	0	23	0	0	27	0	0	0	0
	No	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Exchange of three months and longer other than the above		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Adoption of COIL-style education	Yes	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	No	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

[Number of inbound exchange students]

	FY2018	FY2019			FY2020			FY2021			FY2022					
Target (total number of students by FY)	3	22			23			36			36					
Achievements	5	47			0			7			20					
		In-person travel	Online	Hybrid	In-person travel	Online	Hybrid	In-person travel	Online	Hybrid	In-person travel	Online	Hybrid			
		47	0	0	0	0	0	2	5	0	16	4	0			
[Breakdown by exchange style]																
Exchange of less than three months with credit			1	18	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	0	
		Adoption of COIL-style education	Yes	1	4	0	0	0	0	0	0	3	0	0	4	0
			No	0	14	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
Exchange of three months and longer with credit			4	29	0	0	0	0	0	2	1	0	16	0	0	
		Adoption of COIL-style education	Yes	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0
			No	4	24	0	0	0	0	0	2	1	0	11	0	0
Exchange of less than three months other than the above			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		Adoption of COIL-style education	Yes	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			No	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Exchange of three months and longer other than the above			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		Adoption of COIL-style education	Yes	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			No	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(ii) Outbound Programs (Mobility Programs with COIL)

We added preparation and follow-up based on COIL as well as online interactions between students to conventional exchange and short-term programs, and thus enhanced the effectiveness of studying abroad and increased individual students' motivation toward studying abroad before departure. The three Japanese universities jointly deliver a COIL-style lecture in preparation for UC Davis' language course. In addition, Ochanomizu University holds the International Student Forum, a program that effectively combines online learning with traveling. (See page 47.)

The Three Japanese Universities' Joint Online Program with Gonzaga University

In FY2020, the three Japanese universities started a joint program with Gonzaga University in the U.S. (See page 46.) COIL-style joint lectures at the Japanese universities and a lecture with Gonzaga University were offered during the fall semester. Through discussions with Gonzaga University students, the program dealt with gender issues and compared Japan, Asia, and the U.S. Based on these prior lectures, students attended detailed and practical lectures about inclusive leadership, which were delivered by Gonzaga University as an intensive online course during the spring vacation. After the end of the project, the three Japanese universities plan to continue this program in an online format, aiming to maintain the collaboration between them and implement the program effectively. The online program that focuses on lectures and exchange of views on a specialized topic can be offered in a way that reduces the financial burden, attracts a wide range of students from the three universities, and produces a sufficient learning outcome.

(iii) Inbound Programs (Domestic Circulation-Style Programs for Inbound Exchange Students)

A) Sophia University and Ochanomizu University and B) Sophia University and the University of Shizuoka collaborated with each other for inbound programs.

A) Exchange students accepted by Sophia University were allowed to take a Japanese language course at Ochanomizu University, which counted as credits for Sophia University. Three students actually attended classes in person at Ochanomizu University.

B) The University of Shizuoka organized the “Shizuoka Study Tour,” an on-sight interactive program that provided opportunities for inbound exchange students from Sophia University to learn in a regional area in Japan with their peers. (See page 54.) The tour utilized the University of Shizuoka’s networks with local governments and industries and offered valuable opportunities to experience diverse Japanese societies, cultures, and industry structures. Thirteen inbound exchange students from Sophia University (eight in FY2019 and five in FY2022) as well as Japanese and inbound students from the University of Shizuoka joined the tour.

(2) Implementation of COIL in Courses

As part of the creation of global campuses, COIL-style courses aimed to offer learning opportunities in a global environment to learners who did not have easy access to study abroad opportunities. COIL was implemented in both Japan and the U.S. in a variety of fields from the onset of the project, and was applied in an increasingly multi-layered way.

(i) Background and History of the Promotion of COIL Implementation

At the beginning of the project, priority was given to university-wide general education courses, which can create university-wide ripple effects, and seminar courses, which are taught in a flexible manner. This enriched our experience of applying COIL and increased the momentum for COIL-driven globalization, and also encouraged the implementation of COIL in the Department of Nursing (see page 50), where the curriculum tends to make it difficult for students to study abroad, as well as in graduate courses. In addition, the COVID-19 pandemic shifted class offering to online, which in turn facilitated a surge introducing COIL. The methods of COIL-style education diversified through the use of various online platforms not limited to synchronous connections, and a broader range of departments (academic disciplines) implemented COIL. The faculty members’ and students’ increased online class experience in the prolonged COVID-19 pandemic also promoted COIL. On the other hand, in order to strengthen collaborative work among students and comparative learning with more specialized content, COIL was implemented mainly in seminar-style courses and courses with small class sizes, which could be taught smoothly and effectively while collaborating online with overseas universities. Additionally, there are problems such as hurdles to high-flex classes due to the resumption of face-to-face classes at each university, the shift to face-to-face collaboration due to the resumption of actual travel, and conflicting schedules with partner universities. Such challenges have prevented the project from achieving the target for the number of COIL courses and that of students who attend such courses. In the meantime, the experience gained from running this project accelerated collaboration with U.S. universities other than the partner universities, as well as with universities in a diverse range of countries. The number of COIL courses, including those outside this project, more than doubled between FY2020 and FY2022. This constitutes a significant achievement.

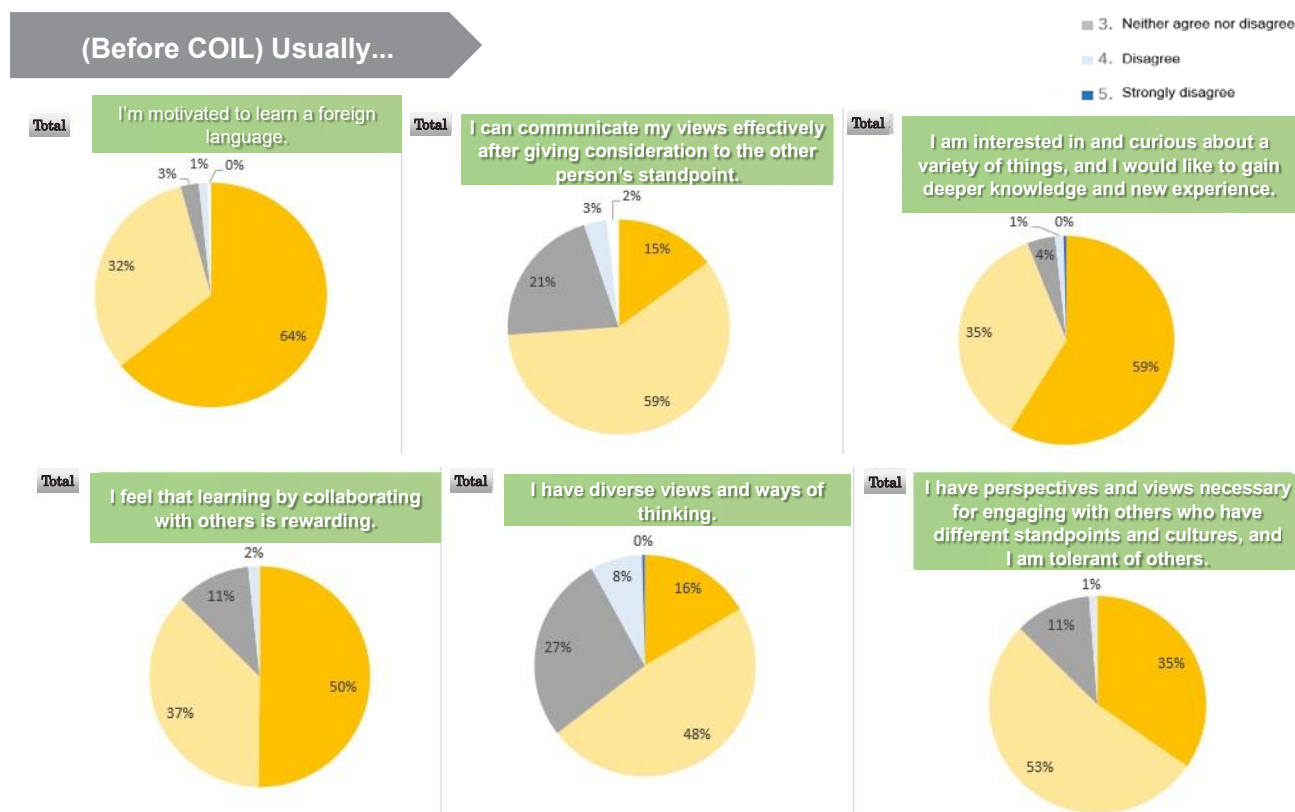
(ii) Numbers of Courses and Students

Target	2018	2019	2020	2021	2022	Achievement	2018	2019	2020	2021	2022
COIL courses in this project*	6	15	26	37	48	COIL courses in this project*	10	25	28	41	38
All COIL courses (in/outside this project) (A)	6	15	26	37	48	All COIL courses (in/outside this project) (A)	16	29	56	123	113
Total number of courses (B)	9692	9692	9692	9692	9692	Total number of courses (B)	10540	11047	11089	11080	10973
Percentage (A/B)	0.1%	0.2%	0.3%	0.4%	0.5%	Percentage (A/B)	0.2%	0.3%	0.5%	1.1%	1.0%
Japanese students who attended a COIL course in this project*	220	640	1045	1450	1855	Japanese students who attended a COIL course in this project*	328	422	479	821	775
Non-Japanese students who attended a COIL course in this project*	30	60	100	140	180	Non-Japanese students who attended a COIL course in this project*	25	27	10	59	39

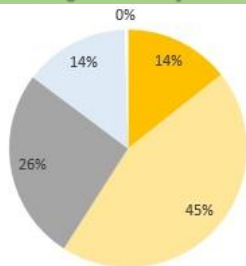
*with U.S. partners

(iii) Measurement of Learning Effects on COIL Students

In the AY2022 fall semester, a questionnaire survey was conducted before and after attending COIL courses to measure the learning effects of COIL on students (The faculty members who helped implement the COIL courses were asked for their cooperation, and the responses were collected on a voluntary basis). The questionnaire measured the students' perception of themselves based on seven items using global competencies as indicators. The results for multiple courses indicate that COIL experience raised awareness and improved skills of the students.

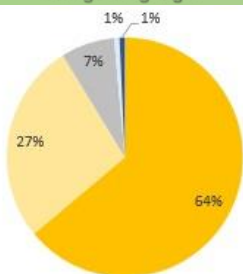


Total I have a sufficient understanding of the cultural background of my country and myself.

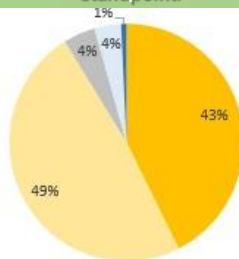


By participating in COIL...

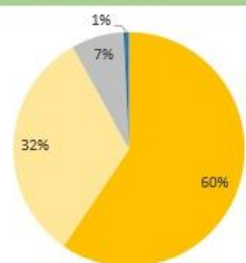
Total I was more motivated to learn a foreign language.



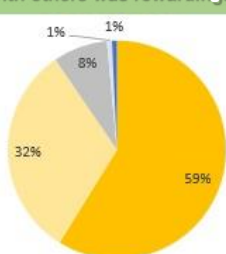
Total I can now communicate my views effectively after giving consideration to the other person's standpoint.



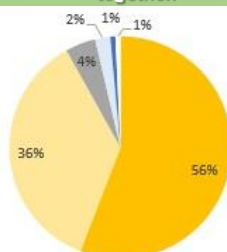
Total I have gotten interested in and curious about a variety of things and now hope to gain deeper knowledge and new experience.



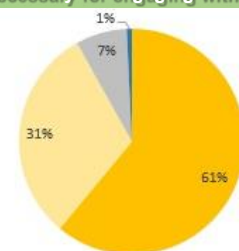
Total I felt that learning by collaborating with others was rewarding.



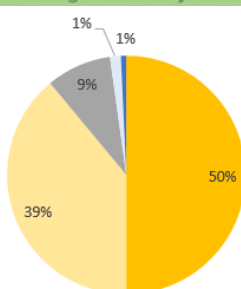
Total I have gained diverse views and ways of thinking by linking pieces of knowledge together.



Total By engaging with teachers/students who have different standpoints and cultures, I have acquired perspectives, views, and tolerance for others that are necessary for engaging with such people.



Total I have deepened my understanding of the cultural background of my country and myself.



(3) Program Quality Assurance

(i) Initiatives to Create an Inter-University Exchange Framework

To share knowledge with each other, implement COIL-style education of higher quality, and strengthen collaboration, the three Japanese universities regularly held the program management meetings where all program managers got together. In addition, a three-university joint working group was set up to review past cases of COIL implementation in courses. Based on the review, the group created a video and a booklet which serve as guidelines for COIL implementation. In the process, we invited a guest from Seattle University to learn about COIL cases and points to note in the U.S. and to exchange opinions, which was a valuable opportunity to compare the implementation of COIL between Japan and the U.S. Furthermore, practical experiences and challenges of COIL in diversifying class styles were shared through regular FD activities. In a joint training program by the three Japanese universities, faculty members in charge of COIL gave guidance on challenges and necessary steps for implementing COIL based on their own experiences. Other initiatives included lectures by Jon Rubin, a leader of COIL in the U.S., and a faculty member from Boston College, who specializes in quality assurance of higher education. A faculty member from Sophia University also shared with faculty/staff of the U.S. partner universities some of the challenges and knowledge concerning COIL implementation in Japan under the theme of diversity.

(ii) Self-Evaluation and Inspection of Programs by Outside Experts

At the end of every academic year, an “Evaluation Committee for International Collaborative Education” was held and outside experts were invited to evaluate the programs. In addition to a review of the progress of the overall project, the committee provided us with advice on quality assurance of COIL-style education, organizational initiatives, collaboration between the three Japanese universities, and the importance of communicating the significance of COIL to the larger society. Their advice contributed to improvement and development of the programs in the following academic year. Additionally, discussing globally shared challenges, such as learning effects of studying abroad online and COIL, and changes in the significance of COIL before and after the COVID-19 pandemic, deepened our longer-term perspective and gave shape to the prospects beyond the project period.

(4) Disclosure of Information and Results Regarding the Implementation of the Project

Throughout the project period, efforts were made to disclose information in more than one medium and communicate results by publishing booklets. Starting from the COIL project brochure, actual experience of participating students and faculty members were included in the English pamphlet written by Japanese and American faculty members about their own experiences of COIL and some of the good practices of COIL implementation. In addition, the implementation guides (video and booklet), which were intended to be tools for university-wide COIL promotion, included not only an overview and case studies but also necessary steps and points to note in detail. The guides were shared among the three Japanese universities and the U.S. partner universities, which effectively added to the momentum for COIL among us. Other initiatives include dedicated websites for COIL created by Ochanomizu University and the University of Shizuoka, which internally and externally disclose the track record of implementation in courses and other related initiatives.

(5) Collaboration Between the Three Japanese Universities and Future Prospects

Self-propelled implementation is essential to keep disseminating the high learning/educational effects of COIL, which “increases the level of flexibility in learning and education and offers a diverse range of

international learning opportunities.” Each university will keep working for university-wide implementation and advance of COIL and maintain the collaboration fostered in the project.

- ▶Commit to initiatives that utilize the strengths and networks of the faculty members in each faculty and department, and promote COIL by finding, training, and educating new faculty members who will adopt COIL
- ▶Find partners other than the U.S. partner universities, strengthen collaboration with the former, and look beyond overseas universities and implement domestic COIL
- ▶Share initiatives that utilize the strengths of the national, prefectural, and private universities, generate ripple effects, and cooperate based on the network of faculty members and administrative staff built through the project
- ▶Continue and advance the three universities’ joint online program with Gonzaga University

III. Report of COIL Courses/Programs

1. Exchange classes among Ochanomizu University, Sophia University, University of Shizuoka, Gonzaga University (Joint Online Program with Gonzaga University)

Makoto Kobayashi
Professor, Ochanomizu University

Ochanomizu University conducted exchange classes under COIL in cooperation with Sophia University and the University of Shizuoka in the second semester of AY2020, 2021 and 2022. At first, we prepared for a 10-day field trip in Washington in the US including a visit to Gonzaga University in March of AY2020. However, the plan did not materialize due to COVID-19. Instead, we participated in an online program offered by Gonzaga University for three years including AY2021 and 2022.

The first thing we had to consider was the fact that the start times of the classes of the three Japanese universities were different. Accordingly, we allowed students to freely come in during the first portion of the 90-minute class time in the afternoon and to come out during the last portion thereof, thus encouraging students at each university to participate in the classes and utilizing the class formats of the universities in a flexible manner. Ochanomizu University used the class name “Interdisciplinary Lectures,” which is used for an ad-hoc course, and opened it to students of all the Faculties at the university. We offered the class mainly under the theme of diversity, leadership, gender for three years, and the faculty members of the three universities gave lectures in their special fields. Sometimes we used PowerPoint presentations in English to provide specialized education in English. The next thing we had to consider was the time difference between Japan and North America, and we decided to have exchanges with Gonzaga University in the morning. The themes of the lectures given by the faculty members of Ochanomizu University during those three years were “Gender and LGBT Problems in Asia and the World,” “Gender and Leadership in Japan,” and “Gender Equity and LGBT Problems in Asia.”

After that, we had students at Ochanomizu University and Sophia University do groupwork and give presentations on their individual study themes in the workshop (hybrid) in January. It was a fresh and fruitful experiment for the students to have discussions with students at other universities. Then we joined Gonzaga University’s intensive five-day online tour, which lasted three hours in the morning each day, from the end of February to March. Gonzaga University’s program, which was called “Innovative & Inclusive Leadership” in AY 2020 and “Inclusive leadership in AY2021 and 2022, was well-organized, with many lecturers and guest speakers appearing and Japanese students taking part in discussions proactively while having their level of understanding checked along the way. While the program presented a universal leadership theory from a peculiarly North American viewpoint, which discussed human qualities and abstract personal relations in a way that was detached from social relationships (for example, company, classroom, Congress, and military), there was much to learn from it. We believe that the students came to understand that the ways in which diversity is discussed are different between Japan and the US, and that they learned leadership firsthand by proactively participating in the exchange classes. Although there was one break in the three-hour session, it was a very tough experience for the students to continue taking the course in English only, but it was an authentic learning opportunity to acquire sophisticated and specialized knowledge through English.

The number of attending students at Ochanomizu University stably increased; in AY 2022, 23 students took the class in the first half of the program and 14 took the Gonzaga University tour.

III. Report of COIL Courses/Programs

2. Ochanomizu University: International Student Forum

Shin Moriyama

Professor, Director of Center for International Education, Ochanomizu University

The 9th Forum (Vassar College)

1. What is the International Student Forum?

The International Student Forum (hereinafter the “Forum”) was held annually starting in 2012, based on the “Multilingual and Multicultural Cyber Consortium” formed in 2009 with eight universities around the world. After the adoption of COIL, the Forum was held with Vassar College, a partner institution in the US. The Forum was offered as “Language Education in Globalizing World I” (taught by Moriyama). This Forum was initiated after the Great East Japan Earthquake as a platform to discuss how a younger generation in the



world can tackle global challenges. After the project was adopted, we had prior learning online in AY2019 (February 2020, the 9th Forum) with the theme of “environmental issues,” and then held the Forum at Vassar College (February 16 to 25). After that came the COVID-19 pandemic, which made overseas travel difficult, with the result that all programs, including the Forum, were conducted online. The Forum’s themes for AY 2020 (March 2021, the 10th Forum), 2021 (February to March 2022, the 11th Forum), and 2022 (February to March 2023, the 12th Forum) were “COVID-19,” “Reconsideration of Peace Education: World War II and the relationship between the US and Japan,” and “Diversity and Inclusion,” respectively. Approximately 20 students from Ochanomizu University and Vassar College got together every year. The Japanese students participated in presentations and discussions in English and the US students in Japanese.

2. Objectives of International Student Forum

The Forum supports the philosophy of foreign language education as intercultural citizenship education, which has been proposed by Byram (2008). Combining language education (plurilingual and pluricultural education) with citizenship education, the Forum has been conducted with the following objectives.

- (1) Plurilingualism and Pluriculturalism: By participating in presentations and discussions using each other’s language, students overcome differences in language, culture, and values and realize dialogue for problem solving and peace.
- (2) Student-Driven Collaboration: Students acquire experiences and skills to build an international event with the hands of students from different countries.
- (3) Intercultural Citizenship Education: Students develop the Competences for Democratic Culture and address the problems of today’s society as global citizens.

3. Course Schedule

Shown below is an overview of the course schedule, including prior learning and the Forum. In the prior learning from October to February, Japanese and American students jointly form groups, and each group decides on a theme and prepares for a presentation. As the students teach each other their languages and prepare for the presentation, they learn about different cultures, values, and views and build a relationship of

III. Report of COIL Courses/Programs

trust that allows them to discuss sensitive issues without reserve. Until the Forum, each group learns independently, with importance placed on autonomy. Special lectures by Japanese and American faculty members are given to deepen the students' expertise.

October Orientation is held, and prior learning starts

November to February Each group decides on a sub-theme, and interacts and prepares for a presentation using social media

- (1) Improve language skills and understand different cultures
- (2) Improve presentation skills in a foreign language
- (3) Build a relationship of trust, through exchange, that allows for discussions of sensitive issues
- (4) Nurture independence and autonomy
- (5) Hold online lectures by Japanese and American faculty members

February The International Student Forum is held

4. Outcomes

At the Forum, various outcomes were reported as indicated below. (For details, refer to the references in which the outcomes are presented.)

- Students engaged in presentations and international and interdisciplinary discussions on various world issues using each other's language.
- Students viewed various problems of the world as their own problems, which contributed to citizenship education in higher education. - For example, the 11th Forum took up World War II, of which Japan and the US, the parties to the war, have different historical memories, and reconsidered peace education. This clearly had a substantial impact on each of the 20 "Competencies for Democratic Peace" (Moriyama, 2023).
- We explored the possibility of holding lectures and joint classes on a daily basis by using Zoom (not as an alternative measure during the COVID-19 pandemic).

5. Comments of Participants

We have received comments from the participants such as below. (For details, refer to the report for each academic year <https://www.li.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/2.html>).

- Interacting with buddies online led to better forum presentations and deeper interaction.
- By presenting and interacting in a plurilingual and pluricultural environment, I improved my plurilingual and pluricultural skills, and broadened my horizons and identity.
- Studying abroad (in America) is different from studying in Japan. I want to connect this experience to studying abroad and deepen my learning.
- Even with the same environmental and peace issues, the ways of understanding and responding to them are completely different, depending on the country and academic field. This made the learning interesting.
- The half-year online exchange enhanced the "Competences for Democratic Culture."
- The student-led approach fostered citizenship and leadership.
- I cherish this encounter and want to continue to interact with these people in the future.

References

Byram, M. (2008). *From foreign language education to education for international citizenship*. Multilingual Matters. (Japanese translation: Byram, Michael (2015).

Moriyama, Shin (2021). "An Analysis of the International Student Forum as Education for Intercultural Citizenship: From the RFCDC Perspective." *Jimibun Kagaku Kenkyu*, 17, 25-38. (academic paper)(in Japanese)

Moriyama, Shin (2022). "Analysis of the International Student Forum as intercultural citizenship

III. Report of COIL Courses/Programs

education: Discussion from the aspects of political education and plurilingual/pluricultural education.” *Jimbun Kagaku Kenkyu*, 18, 55-68. (academic paper) (in Japanese)

Moriyama, Shin(2023).“Analysis of the 11th International Student Forum as intercultural citizenship education: Measuring against the Reference Framework of Competences for Democratic Culture).” *Jimbun Kagaku Kenkyu*, 19, 27-41. (academic paper) (in Japanese)

Moriyama, Shin. “Analysis of the International Student Forum as citizenship education: Mainly from the perspective of cosmopolitan citizenship.” Citizenship Education Research Conference 2020. October 4, 2020, online. (oral presentation)

III. Report of COIL Courses/Programs

3. Sophia University: Learning Together with Nursing Students around the World

Yae Yoshino

Associate Professor, Department of Nursing, Faculty of Human Sciences, Sophia University

The Department of Nursing collaborated with its counterparts at Marquette University, University of Portland, Boston College, University of California at Los Angeles, and Oregon Health & Science University in the US; Mongolian National University of Medical Sciences; Khon Kaen National University in Thailand; and the University of Shizuoka in Japan. The objectives of the course were to (1) acquire the ability to adapt to different cultures, the knowledge necessary for multicultural coexistence, and cultural humility, (2) motivate language learning through experiences of learning together with overseas students, (3) acquire presentation, leadership, and management skills and discover and utilize existing resources, (4) relearn objectively the healthcare system and nursing problems and issues in Japan and acquire new perspectives, (5) gain a sense of self-efficacy and self-affirmation through English presentations, and (6) reflect on the role and mission of nursing across cultures and borders. We offered 30 COIL classes in three years, covering a wide variety of topics such as healthcare access for the socially vulnerable, terminal care, nursing ethics, career development, home medical care, COVID-19, healthcare systems, and reproductive health (contraception for young people, sex education).

The class styles are broadly classified into (1) online lectures by overseas instructors, (2) presentations from Japanese students to American students, (3) presentations and Q&A sessions on the reality, problems, and issues related to healthcare and nursing in each country, and (4) Japan-US joint case study development (virtual, centered on discussions, no interpreters; necessary to read a large amount of literature in English and study beforehand while attending UCLA's regular classes). It was necessary to prepare in accordance with the students' communication skills and take a fine-tuned approach. In compulsory courses (in which students have different levels of English proficiency), lecture handouts were translated into Japanese in advance and consecutive interpretation was provided in class. In addition, Japanese descriptions of relevant terms were prepared and distributed, and reference lists and video pre-assignments were given. Students were thus encouraged to think of questions before class. Students who took elective courses had relatively high levels of language proficiency. It was important to check the students' language levels in advance and, during online classes, to summarize in Japanese as needed and serve as a facilitator while seeing how well they understood.

I received positive reactions from participating students such as "I was surprised by the health disparity and racial discrimination in the medical field that exist in the US," "I realized the importance of learning about and understanding the lifestyle, environment, culture, and values that underlie health issues in developing countries," "It was encouraging that I was able to share my concerns and difficulties with my peers who share the same sense of mission and goals as professionals, even as we are from different cultures and speak different languages," "I want to learn more English so that I can communicate with people from all over the world and grow together with them," "I was able to deepen my study of medicine and nursing in my own country while gaining a more objective and multifaceted perspective," and "I was

III. Report of COIL Courses/Programs

happy to make friends with overseas nursing students and stay connected with them on social media.” Such reactions indicate strong hopes for the continuance of COIL classes.

COIL classes at participating universities
(Clockwise from upper left; Sophia University,
University of Shizuoka,
University of Portland in the US; School of Nursing,
Mongolian National University of Medical Sciences)



III. Report of COIL Courses/Programs

4. Class Exchange between “Seminar (Japanese Language)” at the University of Shizuoka and a “Japanese language” course at the University of North Carolina at Charlotte

Koichi Sawasaki

Professor, School of International Relations/Director of International Affairs Center,
University of Shizuoka

This is a report on exchange activities between “Seminar (Japanese Language)” at the University of Shizuoka and a “Japanese language” course at the University of North Carolina at Charlotte, in which Japanese and English were used. Since the theme of “Seminar (Japanese Language)” is Japanese-language acquisition as a second language, the exchanges in Japanese with Japanese learners served the intent of the seminar. In addition, these exchanges were useful for improving the English skills of the Japanese students because English was used as well.

As shown in the table, the exchanges were conducted for four years. All the activities were treated as assignments done outside class hours. We fumbled our way in 2019, the first year, and only exchanged information using a mailing list (ML) and Flipgrid, but from the next year, we added synchronous exchange via Zoom and got to a point where we were able to make presentations jointly between Japan and the US. Furthermore, in 2021, we achieved as many as three exchanges in total, which were timed to coincide with the spring, summer and fall semesters in the US.

There were difficulties in the activities, and time difference between Japan and the US was a big problem for synchronous exchange. It was also difficult for all the students to maintain the same motivation for weeks.

However, through a series of activities that we kept up, the exchanges sometimes became livelier than what the faculty members had originally expected. In addition, there were scenes where the Japanese students, who were hesitant to say anything in the beginning while waiting and seeing what their counterparts were about to do, gradually became more proactive. Although there are challenges in COIL activities, we will probably be able to enhance their effectiveness by continuing these activities.

Overview of the activities

	2019	2020	2021	2022
Duration	8 weeks in fall	10 weeks in fall	4 weeks in spring/5 weeks in summer/10 weeks in fall	4 weeks in spring/10 weeks in fall
Number of participants in Japan	11	13	12 in spring/12 in summer/12 in fall	10 in spring/10 in fall
Number of participants in US	18	18	16 in spring/12 in summer/21 in fall	13 in spring/15 in fall

III. Report of COIL Courses/Programs

	2019	2020	2021	2022
Methods of activities	Asynchronous Group activities	Asynchronous + synchronous Group activities	Asynchronous + synchronous Group activities	Asynchronous + synchronous Group activities
Tools used	ML/Flipgrid	Padlet/Zoom	Padlet/Zoom	Padlet/Zoom

The outcomes of the exchanges have also been published in the following literature.

- Kato, F., & Sawasaki, K. (2022). "COIL under adverse conditions: Japan-US collaboration in spring semester. *Proceedings of the 37th Annual Conference Southeastern Association of Teachers of Japanese* (pp. 8-18)
- Sawasaki, K. & Mori, C. (2023). COIL activities by English learners and Japanese learners: Effectiveness of cooperative learning between Japan and the US. In A. Otaki, K. Suda, H. Yokota, and S. Wakabayashi (eds.), *The science of research on second-language acquisition* (pp.165-184). Kuroshio Publishers.
- Sawasaki, K., & Yokono, Y. (2021). COIL activities with a Japanese class at an overseas university: "Japanese COIL" project with UNC Charlotte in 2019. *Journal of International Relations and Comparative Cultures*, 20(1), 95-112.

III. Report of COIL Courses/Programs

Shizuoka Study Tour

International Affairs Office, University of Shizuoka

In August 2019 and February 2020, international students, who were accepted by Sophia University from American universities including her partner universities, and students from the University of Shizuoka participated in the three-day Shizuoka Study Tour on which they visited companies and other places in Shizuoka Prefecture. With the aid of the Shizuoka International Business Association (SIBA), the participants studied in advance about the importance of visiting companies in the prefecture and about the places they would be visiting, and deepened their understanding about these matters.

Although the tour was suspended afterward due to the spread of infections of COVID-19, it was resumed as a one-day trip in February 2023 with precautions to prevent infection.

Through all the series of the tour, we visited unique companies in Shizuoka Prefecture, which has diverse industries such as agriculture, manufacturing, and traditional arts and crafts, and a diverse history as well. By doing so, we aimed to promote understanding of Japan's economy, culture, and history and to facilitate comparative studies with the countries of origin of the participants. Furthermore, the Japanese students at the University of Shizuoka, who participated in these tours to provide assistance in communication and guidance for international students, were given an opportunity to deepen understanding of their local area through exchanges with students from other countries as well as a motivation to find a job in their local area and carry on its traditional culture.

1. Overview of implementation

1st tour	
Schedule	August 5th (Monday) to 7th (Wednesday), 2019: 3 days
Participants	4 international students, 4 Japanese students, 5 faculty/staff members, and 1 SIBA member [14 in total]
Visits	Tea Museum, Shizuoka (Shimada City): a tea ceremony experience Sugimoto Tea Company (Shimada City): green tea pound cake making Pi PHOTONICS, INC. (Higashi-ku, Hamamatsu City): a demonstration of HOLOLIGHT INNOVATION ROAD, Yamaha Corporation (Naka-ku, Hamamatsu City): a visit to a corporate museum Yamaha Corporation Kakegawa Factory (Kakegawa City): a visit to a piano factory FUJISAN HONGU SENGENTAISHA, Mt. Fuji World Heritage Center (Fujinomiya City): a visit Kyowa Plant of USUI CO., LTD. (Shimizu-cho, Sunto-gun): an observation of the process of producing diesel engine fuel injection pipes and exchange of opinions with employees

III. Report of COIL Courses/Programs

2nd tour	
Schedule	February 12th (Wednesday) to 14th (Friday), 2020: 3 days
Participants	4 international students, 5 Japanese students, 6 faculty members, and 2 SIBA staff members [17 in total]
Visits	INNOVATION ROAD, Yamaha Corporation (Naka-ku, Hamamatsu City): a visit to a corporate museum Yamaha Corporation Kakegawa Factory (Kakegawa City): a visit to a piano factory OKITSURASEN Co., Ltd. (Shimizu-ku, Shizuoka City): a visit to a factory Sumpu TAKUMISHUKU (Suruga-ku, Shizuoka City): a traditional craft [Suruga bamboo Sensuji craft] experience Miyabi Andon Seisakusho (Aoi-ku, Shizuoka City): a visit to a Suruga bamboo Sensuji craft studio FUJISAN HONGU SENGENTAISHA, Mt. Fuji World Heritage Center (Fujinomiya City): a visit YAZAKI Corporation (Susono City): a visit to an auto parts factory

3rd tour	
Schedule	February 22nd (Wednesday), 2023: one day
Participants	10 international students, 3 Japanese students, 4 faculty/staff members, and 2 SIBA members [19 in total]
Visits	Kunozan Toshogu Shrine, Kunozan Toshogu Museum, Nihondaira (Suruga-ku, Shizuoka City): a tour of a national treasure, etc. IAI CORPORATION (Shimizu-ku, Shizuoka City): an observation of production of small industrial robots Shimizu Container Terminal Corporation, Container Terminal Division of Suzuyo & Co. (Shimizu-ku, Shizuoka City): a tour of an international trade container terminal and logistics system

2 Feedback from participating students

After the tour, we conducted a questionnaire survey of the participating international students and asked questions such as what they found significant about the tour. The following are some of the responses we received: “I found myself attracted to the unique Japanese craftsmanship such as Suruga Sensuji bamboo craft,” “The craftsmanship of the masters stimulated my future business vision,” and “I found it meaningful to interact with students from Shizuoka.”

We also received responses from the participating Japanese students such as “We gained various new perspectives by learning about companies and industries in Shizuoka with international students,” “I thought it was important to take on a challenge without being intimidated by English,” “Although I had no experience studying abroad and it was my first time to spend so much time with people from other countries, I tried speaking English and this challenge made this tour very valuable to me.” Thus, I believe that these tours left a positive impact not only on the international students but also on the Japanese students in terms of their subsequent activities.

III. Report of COIL Courses/Programs



YAZAKI Corporation (Feb 2020)



Shimizu Container Terminal Corporation (Feb 2023)

III. Report of COIL Courses/Programs

Collaborative Programs with Jesuit Worldwide Learning (JWL)

Wonkyung Rhee

Assistant Professor, Center for Global Education and Discovery, Sophia University

Nowadays, we have access to an abundance of free information online. In digital age, what higher education can do is not limited to conveying knowledge. It allows students to expand their horizons, think outside the box, and gain a deeper understanding of our multicultural society. In that process, COIL is a powerful tool that can enhance ICT literacy, which is essential for success in today's global workforce.

The Society of Jesus, which founded Sophia University, has been actively using ICTs in its recent educational practices. Following this trend, the Center for Global Education and Discovery has participated in related activities and developed its own programs. In COIL programs, we have collaborated with the Society of Jesus's Jesuit Worldwide Learning (JWL).

JWL, a non-profit organization (NPO) established from a refugee support project by the Society of Jesus, strives to eliminate education inequality across borders by providing online classes, diploma programs to refugees, students, and communities in various locations worldwide.

The network of Society of Jesus universities plays a central role in JWL's curriculum development and administration. Faculty members mainly from US universities deliver lectures and give feedback to students. JWL students are diverse, ranging from refugees to ordinary students who live in the neighborhoods of JWL project sites. Sophia University aimed to offer education opportunities to students with limited access to higher education, as well as to offer its students can have chance to acknowledge the reality of education gaps

In AY 2019, Sophia University held the Myanmar Study Tour with a focus on education development to enhance understanding of global education gaps. The tour visited two JWL project sites in Myanmar; one in Yangon, the largest city, and the other in Taunggyi, a regional city to gain insight into the ICT environment in developing economies. After the training sessions at local universities and international organizations, culminating in a discussion with students on ways to contribute to online education. The visit also provided an opportunity to hear JWL students' experiences and explore challenges faced in applying COIL in higher education. The tour had to be cancelled in AY 2021 and 2022 due to COVID-19 and the political situations in Myanmar. However, Sophia University seeks to resume the tour and collaborates with countries and international organizations, NGOs, and other entities to continue striving towards quality of education.

We have also been discussing with the JWL headquarters and Society of Jesus universities overseas the possibility of education contribution based on Sophia University's experience in COIL and the Myanmar Study Tour. The JWL headquarters and our faculty/staff held several meetings to talk about delivering online lectures to JWL, with an eye on long-term support for refugees and

III. Report of COIL Courses/Programs

others. Due to the COVID-19 pandemic, the implementation of this initiative had to be delayed twice. However, in the March-May 2022 term, I had the opportunity to become the first East Asian faculty to teach "Introduction to Political Thought," which is a mandatory course in JWL's online degree program "Liberal Studies." The course was attended by 25 students from JWL sites in Kenya, Malawi, Jordan, India, and Sri Lanka. Many of them were living in refugee camps after escaping countries such as Afghanistan, Sudan, South Sudan, Ethiopia, and Somalia. It was a challenge teaching students who were very critical of their home countries and international politics. Meanwhile, students from different cultures, who did not meet each other in their daily lives, got connected online, engaged in Problem Based Learning about challenges they face in common, and deepened their learning. Throughout the course duration, interacting online and posting on forums while taking advantage of online anonymity allowed the students to actively participate in activities that involved private experiences and concerns that would have been difficult to discuss in person.

In the interim, it was made efforts to transfer COIL course experience at Sophia University to JWL students. Lecture contents and assignments for Sophia University's COIL course were partially used for essay assignments at JWL, and we utilized available time to compare the outcomes. In addition to setting goals as a political science course, my objectives were to elevate the students' ICT proficiency, particularly in the areas of PC skills, privacy protection for social media, and ways to find reliable information sources by searching online in multiple languages and detecting fake news. The students often engaged in group work, where they collaborated using the cloud and forums. They thus learned ICT-associated terms and prepared for digital-age workstyles and global standards.

Going forward, we intend to share our JWL experience with our COIL partner universities. In a graduate course titled "Peacebuilding Seminar", we aim to communicate conflict experiences with JWL students and focus on exploring the necessity of peace building via COIL. Additionally, we have plans to relay our experience with faculty members at our COIL partner universities in the US and to initiated COIL in collaboration between Japan, the US, and JWL.



IV. Report of COIL International Summary Symposium

1. Program

9:30	Reception opens
10:00–10:15	Welcome Remarks –Dr. Yoshiaki Terumichi, President, Sophia University Opening Remarks –Mr. Eiji Watanabe, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), Japan
10:15–11:00	Part 1: Reports of Achievements 1-1: Report of the Five-year COIL Project –Dr. Takashi Irohara, Vice President for Academic Affairs, Sophia University 1-2: Report of Three Types of COIL Implementation 1) Joint Program of the three Japanese universities and a US partner university –Dr. Wonkyung Rhee, Assistant Professor, Center for Global Education and Discovery, Sophia University –Dr. Sherri Lynch, Director of Community, Corporate and External Relations, Gonzaga University 2) COIL Courses in Nursing –Dr. Yae Yoshino, Associate Professor, Department of Nursing, Sophia University –Dr. Mayumi Negishi, Assistant Professor, School of Nursing, University of Shizuoka –Dr. Layla Garrigues, Assistant Professor, School of Nursing & Health Innovations, University of Portland 3) International Student Forum –Dr. Shin Moriyama, Professor, Head of Center for International Education, Ochanomizu University –Dr. Peipei Qiu, Professor, Chinese and Japanese on the L.B. Dale & A. Lichtenstein Chair, Vassar College –Dr. Hiromi Tsuchiya Dollase, Associate Professor, Chinese and Japanese and Director of Asian Studies, Vassar College
11:00–11:10	Q&A
11:15–11:45	1-3: Panel Discussion with COIL Experienced Students Moderator: Dr. Koichi Sawasaki, Professor, Director of International Affairs Center, University of Shizuoka <u>Students / Program they joined (The number is according to the one in “1-2” above):</u> –Ms. Yui Kitsukawa / 1 Sophomore, Department of Management, Faculty of Economics, Sophia University –Ms. Sora Maeda / 2 Senior in Department of Nursing, Faculty of Human Sciences, Sophia University –Ms. Yuna Yamaguchi / 2 Senior in Department of Nursing, Faculty of Human Sciences, Sophia University –Ms. Koto Tagami / 3 Graduate School of Humanities and Sciences, Master’s Program, Ochanomizu University
11:45–11:55	Break
11:55–12:45	Part 2: Future Prospects 2-1: Video Messages from US Partner Universities –Dr. Gerardo Blanco, Associate Professor, Academic Director of the Center for International Higher Education, Boston College –Dr. Joseph Hoff, Director of the Global Education and Engagement Office, UNC Charlotte

	<p>-Mr. Nari Fujita, Director of New Academic Initiatives and Destination Davis, UC Davis</p> <p>-Dr. Jeffrey S. Philpott, Director of University Core Curriculum, Seattle University</p> <p>-Ms. Kirsti Ruud, Advisor in the Education Abroad, Seattle University</p> <p>2-2: Panel Discussion with Vice Presidents of the Three Japanese Universities Topic: “Online Education Initiatives / Prospects and Developments of Collaboration of the Three Universities “</p> <p>Moderator: Dr. Makiko Deguchi, Professor, Director of the Center for Global Education and Discovery, Sophia University</p> <p>Panelist:</p> <p>-Dr. Takashi Irohara, Vice President for Academic Affairs, Sophia University</p> <p>-Dr. Masako Ishii-Kuntz, Trustee/Vice President, Ochanomizu University</p> <p>-Dr. Hisao Tomizawa, Vice President for International Exchange, University of Shizuoka</p>
12:45-13:00	<p>Conclusion</p> <p>-Dr. Masako Ishii-Kuntz, Trustee/Vice President, Ochanomizu University</p> <p>Closing Remarks</p> <p>-Dr. Hisao Tomizawa, Vice President for International Exchange, University of Shizuoka</p>

MC: Dr. Yuka Mizutani,
Professor, Center for Global Education and Discovery, Sophia University



Panel Discussion with COIL Experienced Students



Panel Discussion with Vice Presidents



Faculty and Students from Part 1

IV. Report of COIL International Summary Symposium

2. Presentation Slides

Part 1 : Reports of Achievements

1-1: Report of the Five-year COIL Project

US・COIL

FY2018 Inter-University Exchange Project:

“Support for the Formation of Collaborative Programs with U.S. Universities using COIL-style Education”



お茶の水女子大学
Ochanomizu University



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY



静岡県立大学
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Takashi Irohara,
Vice President for Academic Affairs, Sophia University

目次/Contents

1. 事業概要
Overview
2. 学生交流・COIL科目の実績
Achievements
3. 今後の展望
Prospects



1. 事業概要

Overview of the Project



お茶の水女子大学
Ochanomizu University



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY



静岡県立大学
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Project Overview and Human Resources to be Developed

Positioning of the Project in Globalization Strategy

Human Resources to be Developed Through the Project
Human resources who can identify global challenges from the perspectives of human security and multicultural coexistence and contribute to overcoming those challenges

Purpose of the Project

- Promote the creation of global campuses through COIL, and offer international learning opportunities to a large number of students
- Promote multi-layered student exchange between Japan and the US by taking advantage of partner universities' and local communities' resources
- Roll out COIL programs in third countries to contribute to closing education gaps in developing countries

Expected Roles of Tertiary Education Institutions in Japan and the US



What is COIL?

COIL (Collaborative Online International Learning)

Pedagogy to connect with overseas universities online and provide an interactive and collaborative learning environment in and outside class.

• Benefits of COIL

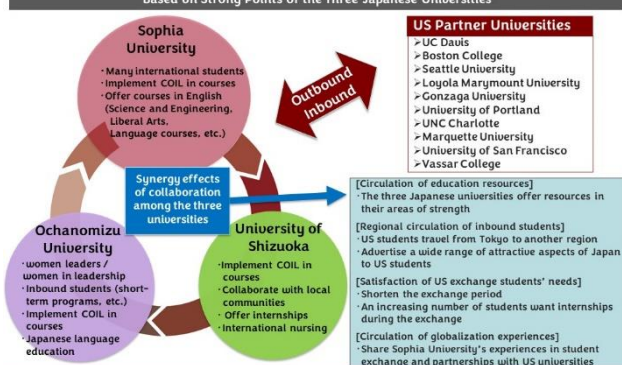
- Enables collaborative and comparative learning between two or more countries.
- Improves students' leadership skills, project planning, management skills, and ICT literacy.
- Fosters networks among faculty members through collaboration in each course (potentially leading to joint research).
- Provides opportunities for international exchange for students who cannot study abroad with various constraints.
- Provides a new form of global education that combines virtual and in-person educational methods.

• Examples of Collaboration Methods

- Synchronous connection using online video conference tools such as Zoom.
- Asynchronous discussions using messenger services and social media.
- Exchange of recordings of lectures and student presentations for feedback and Q&As in /outside class.

Collaboration among the US and Japanese Partners

Project Implementation Structure and Student Exchange Based on Strong Points of the Three Japanese Universities



Details of the Education Program

Multi-layered Education Program

(1) Mobility Programs with COIL

Purpose
Facilitate Japan-US exchange, improve learning outcome
Details
Study abroad + Preparation and follow-up based on COIL
How COIL is applied
Student interactions before and after study abroad, facilitation and Q&A by the program coordinators

(2) Domestic Circulation-Style for Inbound Exchange Students

Purpose
Facilitate Japan-US exchange, improve learning outcome
Details
Study at Sophia (courses in English), Ochanomizu (Japanese language), and Shizuoka (internship)
How COIL is applied
Student interactions before and after study abroad, facilitation and Q&A by the program coordinators, connections with businesses

(3) Implementation of COIL in Courses

Purpose
Create global campuses
Details
COIL is applied in courses related to international nursing, global inclusive society, globalization and international cooperation
How COIL is applied
Applied in nursing, science and technology, US studies, and other courses that benefit from videos and interactions with local students

(4) Collaborative Programs with Jesuit Worldwide Learning (JWL)

Purpose
Close education gaps across borders
Facilitate education exchange through online education
Details
Dispatch students to JWL project sites
How COIL is applied
Online pre-dispatch lecture by local institutions and universities
Content distribution through local learning centers

2. 学生交流と COIL科目の実績

Achievements of Students Exchange and COIL Courses



お茶の水女子大学
Ochanomizu University



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY



静岡県立大学
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

IV. Report of COIL International Summary Symposium

2. Presentation Slides

Report of Student Exchange

Abilities students gain

- Respect for diverse values, flexible attitude toward different cultures, and high willingness to contribute to society
- Ability to understand oneself and others and facilitate global cooperation and harmony

(1) Mobility Programs with COIL

Study abroad +

Preparation and follow-up based on COIL

(2) Domestic Circulation-Style for Inbound Exchange Students

Japanese language education (Ochanomizu),

Shizuoka study tour

Outbound

Year	2018	2019	2020	2021	2022	Total
Target	21	75	81	89	94	360
Actual	26	104	40	80	35	285

Expected to increase due to spring break program participants

Inbound

Year	2018	2019	2020	2021	2022	Total
Target	3	22	23	36	36	120
Actual	5	47	0	7	20	79

Courses with COIL-Style Education Method

Abilities students gain	<ul style="list-style-type: none"> ● Respect for diverse values, flexible attitude toward different cultures, and high willingness to contribute to society ● Ability to understand oneself and others and facilitate global cooperation and harmony 				
(3) Implementation of COIL in Courses					
Implemented in a variety of fields, and evolved through a multi-layered implementation method → Students developed in diverse ways					
Number of Courses					
Year	2018	2019	2020	2021	2022
Target	6	15	26	37	48
Actual	10	25	28	41	25
Number of Students					
As of Nov.					
Year	2018	2019	2020	2021	2022
Target	250	700	1,145	1,590	2,035
Actual	353	449	489	880	To be updated in the end of AY22 (2023/3)
Measurement of students' learning effects					
Conducted a questionnaire survey before and after COIL courses to measure global competency					

3. 今後の展望 Prospects



Self-Propelled Implementation After the End of the Project and Collaboration Between the Three Japanese Universities

Increase Flexibility of Learning and Education Offer Diverse International Learning Opportunities	
Spread the high learning effects of COIL: University-wide implementation and diverse ways of development	
<ul style="list-style-type: none"> ● Focus on initiatives that take advantage of strengths and networks of teaching staff in each faculty and department ● Promote COIL by finding, training, and educating teaching staff who are willing to adopt the method ● Find partners other than US partner universities and strengthen collaboration ● Implement COIL domestically, without limiting partners to overseas universities 	
<p>Sophia University X Ochanomizu University X University of Shizuoka</p>	
Create synergy by constantly strengthening collaboration among the three Japanese universities	
<ul style="list-style-type: none"> ● Share initiatives that take advantage of the strengths of the national, prefectural, and private universities and generate ripple effects ● Cooperate based on the faculty member network built through the project ● Continue and further develop the Gonzaga University online program implemented jointly by the three universities 	

Internationalizing Universities, Disclosing Information, and Sharing the Achievements

Put Achievements Out in Public and Build a Sustainable Implementation Structure	
<ul style="list-style-type: none"> ● Post information online in Japanese and English, communicate and share the achievements through reports and guidebooks ● Report initiative details at COIL workshops and share information for promoting COIL ● Build a sustainable implementation structure by equipping faculty members and TAs with the ability to apply COIL and strengthening such abilities 	
<p>Increase teaching staff in charge of COIL and Engage in PR activities</p> <p>Create a guidebook for COIL implementation</p> <p>Characteristics!</p> <p>Video</p> <p>Communication Platforms</p>	<p>Joint working group by the three universities (FD/SD)</p> <p>For teaching staff interested in adopting COIL: Guidebook and video that not only give an overview but cover practical information for COIL implementation</p> <p>Guidebook</p> <p>COIL Day</p>

ご清聴ありがとうございました

Thank you.



Note:

For the slides from the "Report of Three Types of COIL Implementation," please refer to pp. 21.

IV. Report of COIL International Summary Symposium
3. Voices of Students from Part 1: “Panel Discussion with COIL Experienced Students”

Experience with Joint Online Program with Gonzaga University

Yui Kitsukawa

Department of Management, Faculty of Economics, Sophia University

I attended the online COIL program “Inclusive Leadership: Creating Cultures of Innovation, Engagement, and Belonging.” In this program, we learned in small groups with professors and students at Gonzaga University, which is located in Washington, U.S., about diversity and what is required of organizational leaders to realize diversity, and exchanged opinions with each other. I understood the characteristics of COIL because I had previously experienced it in class.

I had two main motives to participate in this program. First, I thought that COIL would give me an experience similar to studying abroad at low cost. The main attraction of the program was that we were able to easily take courses abroad online while in Japan and reduce financial, time, and physical costs compared to studying abroad. The other main motive was that I wanted to see how much of a gap there was between the English actually spoken in America and my English ability. As I did not know how much I could communicate with my English ability as long as I stayed in Japan, I wanted to actually participate in a course offered at an American university.

My perception of the word “diversity” and social issues related to it changed before and after actually participating in COIL. Before participating in COIL, I thought, as many Japanese think, that diversity meant coexistence of people of various nationalities in a single organization. After attending COIL, however, I noticed that many characteristics exist in a person, ranging from race to gender and family background. In addition, I realized that we are different when it comes to how we understand the many characteristics we have and how we perceive which of them are important, that is, how we perceive our identity, and that that’s what diversity means. I came to an understanding that even if you don’t have people with diverse nationalities come together, diversity has been realized in any situation where you have more than one person.

My participation in this COIL program also changed the way I think about how I look at my identity. I used to think that the female and Asian elements of my characteristics often worked to my disadvantage in society. Therefore, I thought that people who had the same characteristics needed to rise in revolt and take a stand, and in fact, I had often seen such social movements. However, through this program, I found that that identity is not something that can be oppressed, but that it is a normal feature both in a good way and a bad way. Through COIL, I came to the point where I don’t have to focus on being an Asian or being a woman in a negative way.

Understanding the content of the courses in English and having discussions with everyone in English took a lot of physical energy, but I got more than that. Since the course was given online, I think I was able to concentrate on understanding the topics, and gaining and deepening an understanding of how I think and how others think.

IV. Report of COIL International Summary Symposium

3. Voices of Students from Part 1: “Panel Discussion with COIL Experienced Students”

How Students in Nursing Learned Through Participation in COIL

Sora Maeda, Yuna Yamaguchi

Department of Nursing, Faculty of Human Sciences, Sophia University

The Department of Nursing, Faculty of Human Sciences, Sophia University offers COIL in the form of lectures in the third year as a required course in the department and COIL in the fourth year in the form of presentations only for students who were especially motivated. We participated in COIL multiple times because we wanted to be involved in medicine in an international setting in the future. While neither of us had studied abroad before, we were able to grow and learn much.

We both felt that the greatest challenge in taking COIL course was our lack of language skill and international experience. While we had much interest in international learning, a large barrier in language skill was in the way. In addition, we were vaguely conscious of a high hurdle for our little international experience. Particularly, COIL in the form of discussions with overseas students, in which we could prepare ourselves in advance but were required to express our opinions in English and also to understand and respect views of other people, made us more nervous than COIL in the form of lectures and presentations. However, when actually trying it, we found ourselves enjoying participating in COIL by making progress in cooperation with other students while studying hard in advance and receiving support from the faculty member. In addition, actual participation made us recognize our vague anxiety as a clear challenge and set a goal for what to do in the future. Furthermore, we feel that we were able to overcome our challenges by degrees through repeated participation and, as a result, to achieve growth.

Moreover, exchanges with people overseas who were engaged in the same fields of nursing and medicine gave us opportunities not only to learn new things but also to relearn more deeply by adding new perspectives to what we had learned at Sophia University. We think that we were able to take a step closer to actually “respecting other people” and “understanding other people,” which is necessary in nursing care, by recognizing that what we are currently learning is not universally common to all countries and that there is a world beyond our imagination.

We also believe that we acquired more self-confidence than before participation in COIL as a result of experiencing COIL multiple times. This is because both of us were able to complete the courses, despite the anxiety we had when starting to participate in COIL. We also learned that it is important not to shy away from a challenge because of anxiety such as lack of language skill.

IV. Report of COIL International Summary Symposium

3. Voices of Students from Part 1: “Panel Discussion with COIL Experienced Students”

Participating in the 9th International Student Forum

Koto Tagami

Graduate School of Humanities and Sciences, Advanced Sciences program,
Ochanomizu University

I took the course “Language Education in Globalizing World” in the fall semester of 2019 at Ochanomizu University, and then participated in the 9th International Student Forum (theme: environmental issues) held at Vassar College in the US in February 2020. This forum was part of the above-mentioned course, and the main goal of the course for the six months before the symposium was to improve the quality of presentations to be given at the forum through online interactions with students at Vassar College. I major in chemistry at the university. I was a junior at that time and it was the last year before I was assigned to a laboratory. In this report, I intend to summarize what made me, a science student, participate in the International Student Forum, and how the use of online education facilitated international exchanges.

Let me begin by stating the motives. There were three things that made me participate in the International Student Forum. First, this forum was a program combining online interactions with actual overseas travel. I thought that by interacting with American students in advance I would be able to spend more meaningful time during my stay in the US. Second, I wanted to gain experience in making presentations in English before being assigned to a laboratory. And third, I thought I could address the theme of environmental issues from the viewpoint of chemistry, which is my field of study.

I took “Language Education in Globalizing World.” The first thing I did in the course was to choose a theme for my presentation, and then I made preparations so that I could present it in 15 minutes. I decided to make a presentation on environmental pollution caused by plastics from a standpoint of a consumer as well as from a standpoint of chemistry, raising issues and proposing solutions. Once I decided on the theme, I paired up with a student at Vassar College who had a similar theme, and closely interacted with the student via SNS and Zoom. As the students at Vassar College majored in Japanese language and there was a rule that they had to make a presentation in Japanese, we helped each other deal with each other’s language and improved the quality of our presentations along the way. When I look back now, it was in 2019, which was before the COVID-19 pandemic, and I feel that the way the course was conducted using Zoom, Skype, etc., was ahead of its time. During our visit to the US, I was finally able to meet the students at Vassar College, but I did not have the feeling that we met for the first time at all thanks to the online interactions we had had and I spent very valuable time during my stay in the US with their help, just as I had expected.

Next, I will look back on the online interactions, what was good, what was difficult, and the changes in me. First, what was good was that by interacting with the American students I

IV. Report of COIL International Summary Symposium

3. Voices of Students from Part 1: “Panel Discussion with COIL Experienced Students”

was able to improve my language skills, and also to see the importance of expressing my own opinions. I feel that I have developed a more independent-minded personality because of the experience. We sometimes had difficulty in making progress in talks due to the time difference. Even in such cases, we were able to proceed with discussions flexibly by using means such as the on-demand chat function. In addition, I found that we could have sufficient discussion online, even if we didn't go to each other's place, and I was able to put this experience to good use even in the COVID-19 pandemic that followed.

To summarize, I was able to grow up internally by participating in the International Student Forum that included online interactions and actual overseas travel, and I gained experience in presentations in English, which was one of my goals. Going forward, I will do my best to be an internationally-minded researcher by making use of this experience.

IV. Report of COIL International Summary Symposium

4. Summary of

Part 2 “Panel Discussion with Vice Presidents of Three Japanese Universities”

Makiko Deguchi

Professor, Director of the Center for Global Education and Discovery, Sophia University

In the second part of the symposium, a panel discussion with the vice presidents of the three Japanese universities that had collaborated in the project took place under the theme of “Online Education Initiatives/Prospects and Developments for Development of Collaboration in the Three Universities.” The vice presidents discussed the outcomes and future prospects of the collaboration in the project, as well as the current state and potential of COIL and other forms of online education.

With regard to the outcomes of the project, Dr. Takashi Irohara, Vice President for Academic Affairs, Sophia University, stated that connecting students online before departure through mobility programs using COIL increased motivation toward studying abroad, and that a domestic circulation-style program for inbound exchange students utilized the strengths of the partner universities in Japan (Ochanomizu University’s Japanese language education and the University of Shizuoka’s connections with local governments and industries). He also highlighted great synergy effects generated through collaboration between the Japanese universities. Dr. Masako Ishii-Kuntz, Trustee/Vice President of Ochanomizu University, reported that her university actively promoted joint classes with Vassar College, a partner institution, and strengthened the relationship and that joint classes with Gonzaga University under the collaboration between the three Japanese universities were highly regarded by both the faculty and students. Dr. Hisao Tomizawa, Vice President for International Exchange, University of Shizuoka, mentioned the project’s effectiveness and ripple effects that were seen at the faculty, staff, and student levels, and reported that COIL in the international nursing field expanded the scope of partner institutions to include medical universities in Thailand and Mongolia in addition to those in the US. He also stated that a series of meetings by the secretariats of the three universities developed into a rich network for international exchange.

Speaking about the current state and potential of COIL and other forms of online education, Dr. Irohara said that collaboration with other universities is essential, considering limitations to conducting research and education by one university. He suggested the possibility of COIL-style online education becoming a global standard. Trustee/Vice President Ishii indicated the willingness to keep offering online short-term programs and online exchange sessions with overseas partner institutions, even after overseas travel resumed. She also stated that there are plans to implement COIL with overseas partner universities in a newly adopted Inter-University Exchange Project. Vice President Tomizawa explained the importance of COIL as a tool to correct education gaps in and outside Japan, on the basis of COIL’s theme “Human Security and Multicultural Coexistence,” and mentioned the potential of online education as a form of active learning that nurtures multifaceted

understanding and the ability to think from multiple perspectives.

At the end, each vice president gave a message to universities interested in COIL. Vice President Irohara said that it is important to “try first” and recommended taking a first step saying, “You can start from trying just once.” Trustee/Vice President Ishii stated that diversity, equity, and inclusion (DEI) has become an important issue today and that COIL is the style that makes it possible to learn about DEI firsthand. Vice President Tomizawa advised that partner selection need not be a rigid process at first and can start casually and flexibly.

He concluded the meaningful discussion by saying that the knowledge and know-how of COIL that has been nurtured through the collaboration between the three different types of universities (private, national, and prefectural) has universality that can be applied to almost all universities in Japan, and that he hoped to share it with many more universities.

IV. Report of COIL International Summary Symposium

5. Summary of the Symposium

Upon Completion of COIL International Summary Symposium

Hisao Tomizawa

Vice President for International Exchange, University of Shizuoka

The summary symposium clarified the potential and challenges of COIL projects through the report on the outcomes of a variety of COIL implementation cases and exchange of views and information on the summary and prospects. In the keynote speech of the kickoff symposium held in 2018, when the project started, former President Kito of the University of Shizuoka pointed out that in carrying out the program, collaboration between educational institutions established by different entities and have different foundational principles is significant in two respects. First, a long-distance collaborative project that transcends a regional framework has significance as a new way of cooperation between universities. Second, universities with different foundational principles are expected to propose how they can collaborate to achieve a common goal. He suggested that such a project could be a pioneering model for creating the future. Through the summary symposium, it was recognized that materials to build such a pioneering model have largely been collected. In particular, it is worthwhile to pursue a model that effectively incorporates COIL and online classes into a university's education system, while further deepening and expanding the collaboration centered around the three universities. Thanks to COIL, students in Japan can benefit from experiences similar to studying abroad. On the flip side, as President Terumichi of Sophia University proposed, students who are studying abroad may be able to take COIL courses offered by their home universities in the future. The potential of COIL thus expands.

An attempt to collaborate between regions based on "Inclusive Leadership Program," an online program offered by a US university, has set an inspirational example for collaboration that transcends a regional framework. It is encouraging to imagine a picture where, for example, alumni of this leadership development program, which is inclusive in terms of gender and all other aspects of human diversity, hone their skills at Ochanomizu University's Institute for Gendered Innovations and go on to innovate the development of products for women. Such innovators could start a business in Shizuoka, stop the outflow of the population, especially women, from the prefecture, and actively contribute to revitalizing regional communities. In any case, it will be imperative for universities to evolve by collaborating with other universities in a multifaceted and strategic manner, while maintaining their unique values and *raison d'être* that characterize them. I hope the three universities will be able to more actively utilize the network created by the collaboration so far and work together to build a pioneering model of university education.

V. Project Summary

Masako Ishii-Kuntz

Trustee/Vice President, Ochanomizu University

Looking back the past five years, I feel that the entire society experienced a tremendous change due in part to the COVID-19 pandemic. Amid such circumstances, collaborative online learning, such as COIL, has become more commonplace year by year, and we have diverse forms of learning in place that were unthinkable five years ago. While study-abroad and overseas training programs that involve travelling have resumed, I am certain that COIL, which allows students to connect online with overseas faculty and students and to have opportunities to learn collaboratively, is still highly meaningful for students who are expected to play an active role globally in the future.

According to data provided by Japan Student Services Organization, the number of exchange students from Europe, North America, and Oceania dropped significantly due to the pandemic. In particular, the actual number of exchange students from North America in 2021 decreased by 58.3% from 2019. This indicates that the network with ten universities in the US, created through the project, will be an important foothold for restoring exchange programs.

In the past five years, over 2000 students in total have experienced COIL with ten US universities. The number is estimated to be several times larger if we include COIL with institutions other than the ten universities. COIL may have led some of those students to cultivate interest in overseas countries or to make up their minds to study abroad for a long period of time. For example, Ms. Tagami, who participated in the summary symposium as a student representative of Ochanomizu University, acquired a lot of experience including COIL, and she represented and introduced her university in English at a large-scale event organized by JST in the last academic year. Her next step will be to study abroad for a long term. Thus I believe that each university has many cases where COIL served as a springboard for students to step up to the next level.

I myself implemented COIL last year with Dongduk Women's University in South Korea. The students actively exchanged views online beyond the university frameworks, and it was a great opportunity for me to see, first-hand and on screen, promising students being inspired by others. By implementing COIL jointly with our counterpart universities, I also realized that COIL not only benefits students but is an effective way for the faculty and the university as a whole to deepen relationships with other universities in and outside Japan.

Even after the project period ends, we as three partner universities look to keep collaborating with each other in various forms. While online learning will continue to develop in accordance with the change of the times, the experience and inter-university collaboration nurtured through the COIL project in the past five years remain with us as invaluable assets. I am convinced that there will be many occasions where we can utilize these assets and roll out various forms of education.

I would like to conclude the summary by extending my gratitude again to all the people from Sophia University and the University of Shizuoka who have worked together to advance the project, as well as all those involved in this project.



令和 5 年 3 月発行
Published in March, 2023

上智大学 グローバル教育推進室
Office of Global Education and Collaboration, Sophia University

お茶の水女子大学 国際課
International Affairs Division, Ochanomizu University

静岡県立大学 国際交流室
International Affairs Office, University of Shizuoka